

# 前 谷 遺 跡 II

埋蔵文化財発掘調査報告書

2014

埼玉県戸田市教育委員会





第5号溝跡出土 線刻画が描かれた須恵器片 (S = 2 / 1)



## はじめに

埼玉県南東部に位置する戸田市は、荒川の自然に恵まれ、古くから交通の要衝として発展してきました。現在は交通の利便性から都心部のベッドタウンとして市街地化が進み、人口13万人を超える都市に成長しています。

近年、まちの景観の変化とともに社会的、文化的な環境も変わってきておりますが、古来から受け継がれてきた伝統や歴史を守り、人々の絆を一層強いものとするために、文化財の保護が求められているところです。

そのような状況下において、今回報告いたします前谷遺跡第2次調査は、集合住宅建設に伴い、平成19年に緊急発掘調査が行われたものです。この発掘調査により、弥生時代から中世に生活を営んだ人たちが遺した貴重な資料を多数検出し、当時の人々の生活や土地利用のあり方などを知る良好な資料を確認することができました。本書が、戸田をより深く学習するための一助となることができましたら幸甚に存じます。

最後になりましたが、本事業の遂行にあたり、ご尽力、ご協力を賜りました関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成26年3月

戸田市教育委員会  
教育長 羽富 正晃



## 例 言

1. 本書は、埼玉県戸田市上戸田2丁目26番地7、8、10所在の前谷遺跡第2次発掘調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、有限会社山昌（以下「事業者」という）による共同住宅建設に伴う緊急調査として、事業者から調査委託を受け戸田市遺跡調査会（担当：小島清一）が実施した。また、整理作業、報告書作成については平成19年度から平成23年度までは事業者および戸田市からの委託を受け戸田市遺跡調査協力会が（担当：小島清一）、平成24年度から平成25年度は戸田市教育委員会（担当：岩井聖吾）が実施した。
3. 発掘調査および平成19年4月16日から平成19年5月21日までに実施した整理作業の経費は事業者の負担による。また、平成19年度から平成25年度までの整理作業および報告書刊行に要した経費は戸田市の負担による。
4. 前谷遺跡第2次発掘調査は平成19年2月13日から平成19年3月20日まで実施し、出土品整理は平成19年4月16日から平成26年3月25日まで戸田市教育委員会生涯学習課埋蔵文化財整理室（戸田市立戸田東中学校内）で実施した。
5. 本書は、戸田市教育委員会が刊行した。
6. 本書は、岩井聖吾が編集、執筆を行った。
7. 発掘現場での記録写真は小島清一が担当し、出土遺物の写真撮影は岩井聖吾が担当した。
8. 本書の著作権は、戸田市教育委員会が保有する。
9. 出土遺物及び発掘調査に伴う各種データ等はすべて戸田市教育委員会が保管し、活用を図るものとする。
10. 本事業は、以下の組織により実施した。

【発掘調査・出土品整理】（平成19年4月16日～5月21日）

調査主体者 戸田市遺跡調査会

会 長 羽富 正晃

事務局兼調査担当 小島 清一

発掘調査参加者

井之上広美 梅澤光枝 榎本 昇 岡崎久子 尾形美枝子 加藤晴美 小山香織

早乙女孝子 関徳太郎 高橋富美子 二瓶貴美子 仁保淳子 廣瀬幸子 布施香織

本田五月 渡辺豊子

【出土品整理】

戸田市遺跡調査協力会

（平成19～22年度）

会 長 関 徳太郎

副 会 長 廣瀬 幸子 渡辺 豊子  
会 計 尾形 美枝子 加藤 晴美  
監 事 本田 五月 二瓶 貴美子  
理 事 早乙女 孝子 高橋 富美子 榎本 昇 梅澤 光江

(平成 23 年度)

会 長 渡辺 豊子  
副 会 長 尾形 美枝子  
会 計 榎本 眞由美  
監 事 本田 五月  
理 事 早乙女 孝子 高橋 富美子 榎本 昇 梅澤 光江

【出土品整理・報告書作成】

戸田市教育委員会

(平成 24 ～ 25 年度)

教 育 長 羽富 正晃  
教 育 部 長 奥墨 章 (平成 25 年 3 月 31 日まで)  
山本 義幸 (平成 25 年 4 月 1 日から)  
次 長 江添 信城  
生涯学習課長 頓所 博行  
生涯学習課主幹 津田 孝一  
生涯学習課課主事 池上 裕康  
生涯学習課主事補 岩井 聖吾  
整 理 補 助 員 榎本眞由美 尾形美枝子 平吹久美子

11. 本書の作成にあたり、次の方々・機関にご指導、ご助言を賜った。記して謝意を表すものである。

青木弘 赤熊浩一 大谷 徹 川畑隼人 坂上直嗣 高橋龍三郎 富田和夫 長澤有史  
福田 聖 吉田幸一 若松良一

川口市遺跡調査会 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課 大成エンジニアリング株式会社

早稲田大学考古学研究室

(敬称略・五十音順)

## 凡 例

1. 挿図中の地図、検出遺構実測図等の方位は、図中に真北の方位を示した。
2. 本書の国家座標、緯度、経度は世界測地系に則している。
3. 遺構番号は調査の進捗過程で、そのプランの確認された順に遺構の種別ごとに付したが、整理・報告書作成作業の過程で遺構番号を振り直している。  
なお、遺構略号は下記のとおりである。  
SX：周溝状遺構    SB：掘立柱建物跡    SA：柵列跡    SD：溝跡    SE：井戸跡  
SK：土坑    P：ピット
4. 発掘調査時の土層観察における色調の記録は、記録者の主観に基づいている。一方、遺物観察における色調は、『新版 標準土色帖』2013年度版（小山正忠・竹原秀雄 編・著者、農林水産省農林水産技術会議事務所 監修、財団法人日本色彩研究所 色票監修、日本色研事業株式会社 発行）を参考にした。
5. 遺物拓影図は、向かって左側に外面を、右側に内面を示した。ただし、外面のみの場合には、向かって左側に外面を示した。また、底面は下に、天井面は上に示した。
6. 遺物の種別の内、弥生時代後期から古墳時代前期初頭に属する土器は、すべて「土師器」と標記した。
7. 遺物実測図のうち、須恵器は断面を黒塗りにし、その他の土器については断面を白抜きにした。
8. 遺物実測図中のトーンは赤彩箇所を表す。
9. 遺物観察表法量の [ ] の値は残存部からの推定値を示す。
10. 遺物実測図および遺構実測図の縮尺はすべて挿図中に示した。
11. 標高は、T. P（東京湾中等潮位）を基準とした。
12. 遺構実測図の水糸レベルは全て標高 3.10m に統一した。
13. ピットの計測表は遺構実測図中に示した。
14. 出土遺物の註記は、下記の原則に基づき行った。

例： M Y .    II .    S J    —    1 .    2 5  
    └──┬──┘    └──┬──┘    └──┬──┘    └──┬──┘    └──┬──┘  
    遺跡略号    調査次    遺構種別    遺構番号    遺物番号

表面採取遺物や攪乱層出土遺物については、遺跡略号及び調査次のみを記載した。

なお、写真図版中の遺物写真には、旧遺構番号のまま註記を修正していないものがある。

15. 写真図版中の遺物写真の縮尺は全て2分の1に統一した。

# 目 次

はじめに

巻頭図版

例 言／凡 例

目次／挿図目次／表目次／図版目次

## 第 1 章 調査に至る経緯と経過

第 1 節 調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

### 第 2 節 発掘調査と整理作業の経過

1 発掘調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

2 整理作業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

## 第 2 章 周辺環境と遺跡・調査の概要

第 1 節 地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

第 2 節 歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

第 3 節 遺跡・調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

## 第 3 章 検出された遺構と遺物

### 第 1 節 弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の遺構と遺物

1 周溝状遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

### 第 2 節 平安時代以降の遺構と遺物

1 掘立柱建物跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15

2 溝跡・・ 16

3 柵列跡・・ 21

4 井戸跡・・ 24

5 土坑・・ 29

6 ピット・・ 32

### 第 3 節 その他の出土遺物

1 遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35

## 第 4 章 まとめ

1 弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36

2 平安時代から中世・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36

3 線刻画が描かれた須恵器片について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37

結語・・ 38

引用・参考文献

巻末図版

報告書抄録／奥付

## 挿図目次

第 1 図	埼玉県地形	4	第 15 図	第 5 号溝跡出土遺物実測図	21
第 2 図	戸田市域地形	5	第 16 図	第 1～4 号柵列跡実測図 (SA01・SA02・SA03・SA04)	23
第 3 図	前谷遺跡及び周辺の遺跡位置図	6	第 17 図	第 1 号井戸跡実測図 (SE01)	24
第 4 図	前谷遺跡調査区位置図	8	第 18 図	第 1 号井戸跡出土遺物実測図	25
第 5 図	調査区全体図	10	第 19 図	第 2 号井戸跡実測図 (SE02)	26
第 6 図	第 1 号周溝状遺構実測図 (SX01)	11	第 20 図	第 2 号井戸跡出土遺物実測図	27
第 7 図	第 1 号周溝状遺構出土遺物実測図	12	第 21 図	第 1・3・4・5 号土坑実測図 (SK01・SK03・SK04・SK05)	29
第 8 図	第 2 号周溝状遺構実測図 (SX02)	13	第 22 図	第 2 号土坑実測図 (SK02)	31
第 9 図	第 2 号周溝状遺構出土遺物実測図	14	第 23 図	第 2 号土坑出土遺物実測図	31
第 10 図	第 1 号掘立柱建物跡実測図 (SB01)	15	第 24 図	第 26・31・35 号ピット実測図 (P26・P31・P35)	33
第 11 図	第 1 号溝跡出土遺物実測図	16	第 25 図	ピット出土遺物実測図	33
第 12 図	第 1・2・3 号溝跡実測図 (SD01・SD02・SD03)	17	第 26 図	ピット全体図	34
第 13 図	第 4・5 号溝跡実測図 (SD04・SD05)	18	第 27 図	遺構外出土遺物実測図	35
第 14 図	第 4 号溝跡出土遺物実測図	20	第 28 図	線刻画模式図	37

## 挿表目次

第 1 表	前谷遺跡周辺遺跡の概要	6	第 7 表	第 1 号井戸跡出土遺物観察表	25
第 2 表	第 1 号周溝状遺構出土遺物観察表	12	第 8 表	第 2 号井戸跡出土遺物観察表	28
第 3 表	第 2 号周溝状遺構出土遺物観察表	14	第 9 表	第 2 号土坑出土遺物観察表	32
第 4 表	第 1 号溝跡出土遺物観察表	16	第 10 表	ピット出土遺物観察表	33
第 5 表	第 4 号溝跡出土遺物観察表	20	第 11 表	遺構外出土遺物観察表	35
第 6 表	第 5 号溝跡出土遺物観察表	21			

# 図版目次

## 図版 1

- 1 調査区全景
- 2 第1号周溝状遺構・第1号土坑完掘
- 3 第2号周溝状遺構完掘
- 4 第2号周溝状遺構遺物出土状況
- 5 第1号溝跡完掘

## 図版 2

- 1 第1号掘立柱建物跡完掘
- 2 第2号溝跡完掘
- 3 第3・4・5号溝跡完掘
- 4 第1号井戸跡未完掘状況
- 5 第1号井戸跡遺物出土状況

## 図版 3

- 1 第1号井戸跡板碑片出土状況
- 2 第2号井戸跡未完掘状況
- 3 第2号土坑完掘
- 4 第3号土坑未完掘状況
- 5 第4号土坑完掘
- 6 第5号土坑完掘
- 7 第26号ピット完掘
- 8 第31号ピット完掘

## 図版 4

- 出土遺物写真（1）  
SX01・SX02・SD01・SD04

## 図版 5

- 出土遺物写真（2）  
SD05・SE01・SE02（1）

## 図版 6

- 出土遺物写真（3）  
SE02（2）

## 図版 7

- 出土遺物写真（4）  
SK02・ピット・遺構外

# 第 1 章 調査に至る経緯と経過

## 第 1 節 調査に至る経緯

平成 18 年、事業者である有限会社山昌（以下「事業者」と略す）から戸田市教育委員会（以下「市教育委員会」と略す）に対し、戸田市上戸田 2 丁目 26 - 7, 8, 10 における、970.71 m<sup>2</sup>の共同住宅および事務所建設事業計画と埋蔵文化財の取り扱いについて相談があった。

市教育委員会では、事業計画地が周知の埋蔵文化財包蔵地（前谷遺跡）内に所在しており、開発工事中に埋蔵文化財が発見される可能性が高いため、事業者に対して工事着工前に試掘調査を実施するように指導した。

これを受け、平成 18 年 12 月 15 日に事業者から市教育委員会に対し試掘調査の依頼書が提出され、試掘調査を実施することとなった。

試掘調査は平成 19 年 1 月 10 日・11 日の日程で、市教育委員会生涯学習課小島清一が調査員となり、戸田市遺跡調査協力会（以下「協力会」という）が実施した。試掘調査では、溝状遺構や土坑、ピットを検出し、これに伴って弥生時代後期から古墳時代前期、平安時代に帰属すると思われる土器等を検出した。

この調査結果に基づき、市教育委員会と事業者間で埋蔵文化財の保存について協議をもち、事業計画の変更が困難であるとの結論に達したため、記録保存のための緊急発掘調査を実施することで合意した。

平成 19 年 1 月 23 日、事業者から文化財保護法第 93 条の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出され、市教育委員会は平成 19 年 2 月 1 日付戸教生第 1518 号にて埼玉県教育委員会（以下「県教育委員会」という）あてに進達した。

これを受け、県教育委員会から事業者に対し、平成 19 年 2 月 15 日付教生文第 3-1184 号で、申請地内における工事着手前に発掘調査を実施するよう指示があった。

発掘調査および出土品整理については、事業者と市教育委員会の協議の結果、事業者が戸田市遺跡調査会（以下「調査会」という）に委託して実施することとなり、平成 19 年 2 月 6 日に事業者と調査会で締結された「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」に基づき平成 19 年 2 月 13 日から同年 7 月 31 日の期間で実施することとなった。

調査会は、文化財保護法第 92 条の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出を平成 19 年 2 月 6 日付戸遺発第 1 号で市教育委員会に提出し、市教育委員会は同日付戸教生第 1556 号にて県教育委員会あてに進達した。

文化財保護法第 92 条の届出に対して、県教育委員会から調査会あてに平成 19 年 2 月 6 日付け教生文第 2-84 号にて発掘調査を慎重に実施するよう指示通知があり、これを受け前谷遺跡第 2 次発掘調査が実施されることとなった。

## 第2節 発掘調査と整理作業の経過

### 1 発掘調査

前谷遺跡第2次発掘調査は、平成19年2月13日から同年3月20日まで実施した。調査面積は970.71㎡である。発掘調査では調査日誌等を作成していなかったため、以下の記述は写真の撮影日時および調査担当者、調査参加者からの証言に基づくものである。

調査区内における表土掘削は重機を用いて行った。表土掘削時に生じた排出土は、調査区の西方に土山を築き仮置きした。重機によって遺構確認面まで表土を掘削した後、人力にて遺構確認を実施した。遺構確認面には測量用の国家座標（世界測地系）に基づく基準杭を打設し、これを基準として4m四方のグリッドを設定した。

遺構確認後は、随時遺構掘削、遺物採取、ネガフィルム・リバーサルフィルムを用いた写真記録を実施した。

検出した遺構は、簡易遣り方測量によって平面図を作成し、出土遺物は必要に応じて同様の測量方法により平面図上に出土位置を記録した。

遺構・遺物に関する平面図作成が終了した時点で調査区全景写真を撮影し、一部調査区内ではレベリングを実施した。そして、記録作業が終了した時点で仮置きしていた排出土の埋め戻しを実施し、平成19年3月20日に機材等の搬出を終え発掘調査を終了した。

### 2 整理作業

当該調査にかかる出土遺物及び図面の整理作業、報告書作成作業は平成19年4月16日から平成26年3月25日まで実施した。

平成19年4月16日から平成19年5月21日までは、事業者と調査会で締結した「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」に基づき、出土遺物の洗浄と註記作業、第一原図の整理等を実施した。

また、平成19年度から平成23年度は、戸田市と協力会との間で締結された業務委託契約書に基づき、協力会が出土遺物の接合および復元、拓影採取、第二原図・版下作成等の整理作業を実施した。各年の業務委託契約書名および契約締結日は以下のとおりである。

#### 【平成19年度】

「南原遺跡等出土品及び図面整理等業務委託契約書」（平成19年4月1日締結）

#### 【平成20年度】

「南原遺跡等出土品及び図面整理等業務委託契約書」（平成20年4月1日締結）

#### 【平成21年度】

「南原遺跡等出土品及び図面整理等業務委託契約書」（平成21年4月13日締結）

#### 【平成22年度】

「南原遺跡等出土品及び図面整理等業務委託契約書」（平成22年4月21日締結）

#### 【平成23年度】

「南原遺跡等出土品及び図面整理等業務委託契約書」（平成23年4月21日締結）

平成23年度には市教育委員会が株式会社東京航業研究所に委託し、出土遺物の一部について実測図作成を実施した。

平成24年度から平成25年度は、市教育委員会が協力会に代わり整理作業および報告書作成作業を実施した。協力会で作成した版下、拓影図等は、発掘調査報告書に使用可能な最低限の水準に達していなかったため、再整理を実施しながらの報告書作成作業となった。

遺構平面図、断面図、エレベーション図等の図面類については、協力会で作成した第2原図をスキャナでコンピュータに取り込み、デジタルデータ化を実施した。その後図面データはAdobeIllustratorを用いて第1原図と調整しながらデジタルトレースを行い、遺構全体図および個別図の作成を行った。

遺物については、報告書掲載遺物の抽出から改めて実施した。拓影図は新たに採り直し、スキャナにてコンピュータに取り込んだ後、AdobePhotoshopおよびIllustratorを用いて修正を行った。実測図は、株式会社東京航業研究所に作成委託がなされたもの以外は実測を行い、スキャナにてコンピュータに取り込んだ後、Illustratorにてデジタルトレースを行った。そして、拓影図データと実測図データを調整し、TIFF形式にて画像ファイル化を行った。

発掘現場で撮影した写真等については、フィルムスキャナを用いてネガフィルム・リバーサルフィルムをそれぞれデジタルデータ化した。そして、写真データはPhotoshopを用いてコントラストの修正、グレースケール変換等を行い、TIFF形式ファイルを作成した。遺物写真については、NikonD5100を使用してRAW（NEF）形式で撮影した。その後AdobeCameraRawを用いて現像処理およびホワイトバランスの修正を行いTIFF形式ファイルを作成、さらにPhotoshopにて縮尺、背景等の調整を実施した。

全てのデータが完成した後、IllustratorおよびAdobeInDesignにて版下を作成し、IND形式ファイルにて入稿した。

## 第2章 周辺環境と遺跡・調査の概要

### 第1節 地理的環境

戸田市は、埼玉県最南端部に位置し、東西約6.0km、南北約3.0m、面積18.17km<sup>2</sup>の東西に細長い形状を呈する。北はさいたま市、東は蕨市と川口市にそれぞれ地続きで接し、西の朝霞市と和光市、南の東京都板橋区と北区には荒川を隔てて接している。市域には国道17号線（中山道）や新大宮バイパスが南北に走り、また首都高速5号線や東京外郭環状道路、JR埼京線の開通により、交通の利便性が高まり急激な市街地化が進んでいる。また、都心に近い立地のため、工場や流通センターなども数多く所在する。

戸田市の地形は、埼玉県西部の山地に端を発する荒川によって形成された平坦な沖積低地（荒川低地）が全域を占める。荒川は氾濫や流路の変更によって、市域の中央部を西は美女木から上戸田を通り、東は川口市にかけて微高地（自然堤防）を形成している。この微高地の南北に低地が裾のように広がる。

前谷遺跡は、上戸田2丁目を中心に広がる遺跡である。JR埼京線戸田公園駅から北東に約700m、戸田駅から南東に約900mの位置に所在し、東側に国道17号線（中山道）が南北に走る。現在は土地区画整理が行われ、宅地化が進んでいる。

前谷遺跡は荒川左岸に形成された標高約3.5mほどの自然堤防上に立地する。この自然堤防は荒川旧河道に沿うように発達し、戸田市域では美女木から笹目を通り、本町、上戸田を抜けて川口市へと延びる。戸田市域における自然堤防上の標高は約3.0～4.5mであり、低地部は約2.5～



第1図 埼玉県の地形

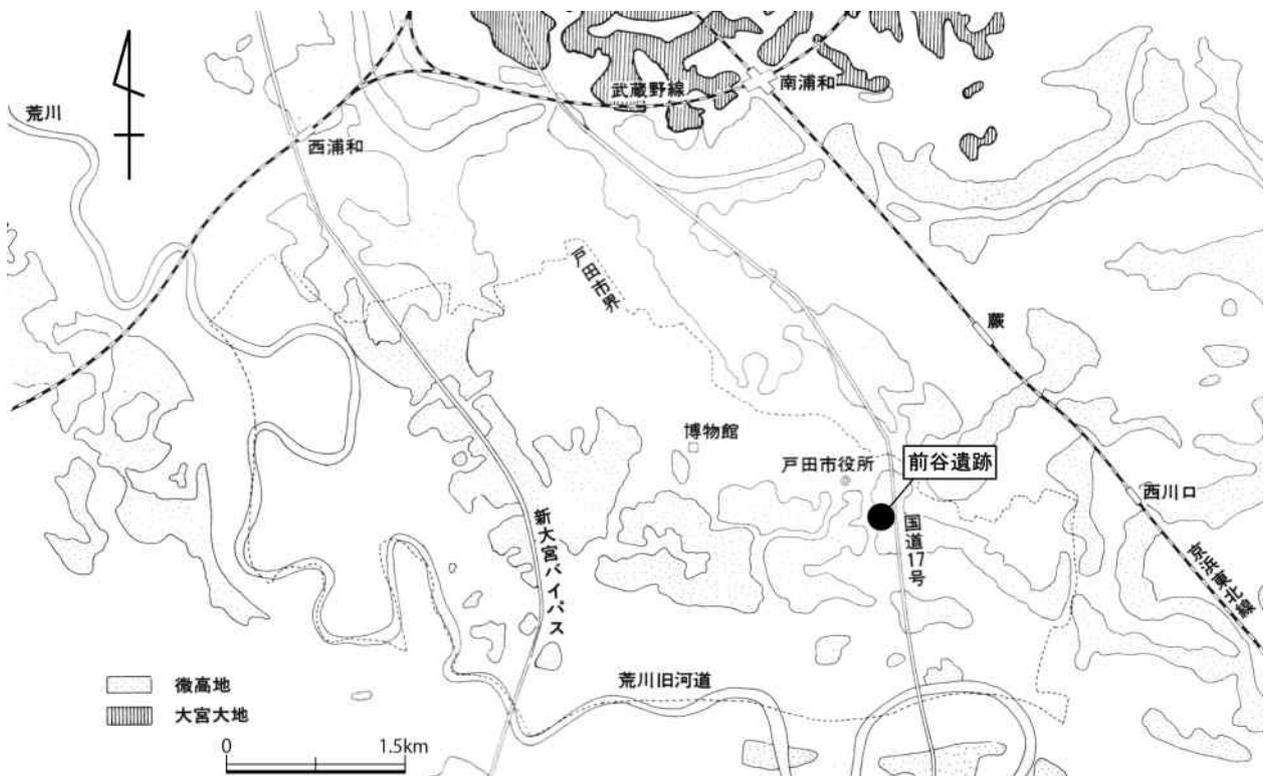
3.0mほどであるため、現在ではほぼ起伏を感じることができないほどに周辺には平坦な地形が広がっている。

## 第2節 歴史的環境

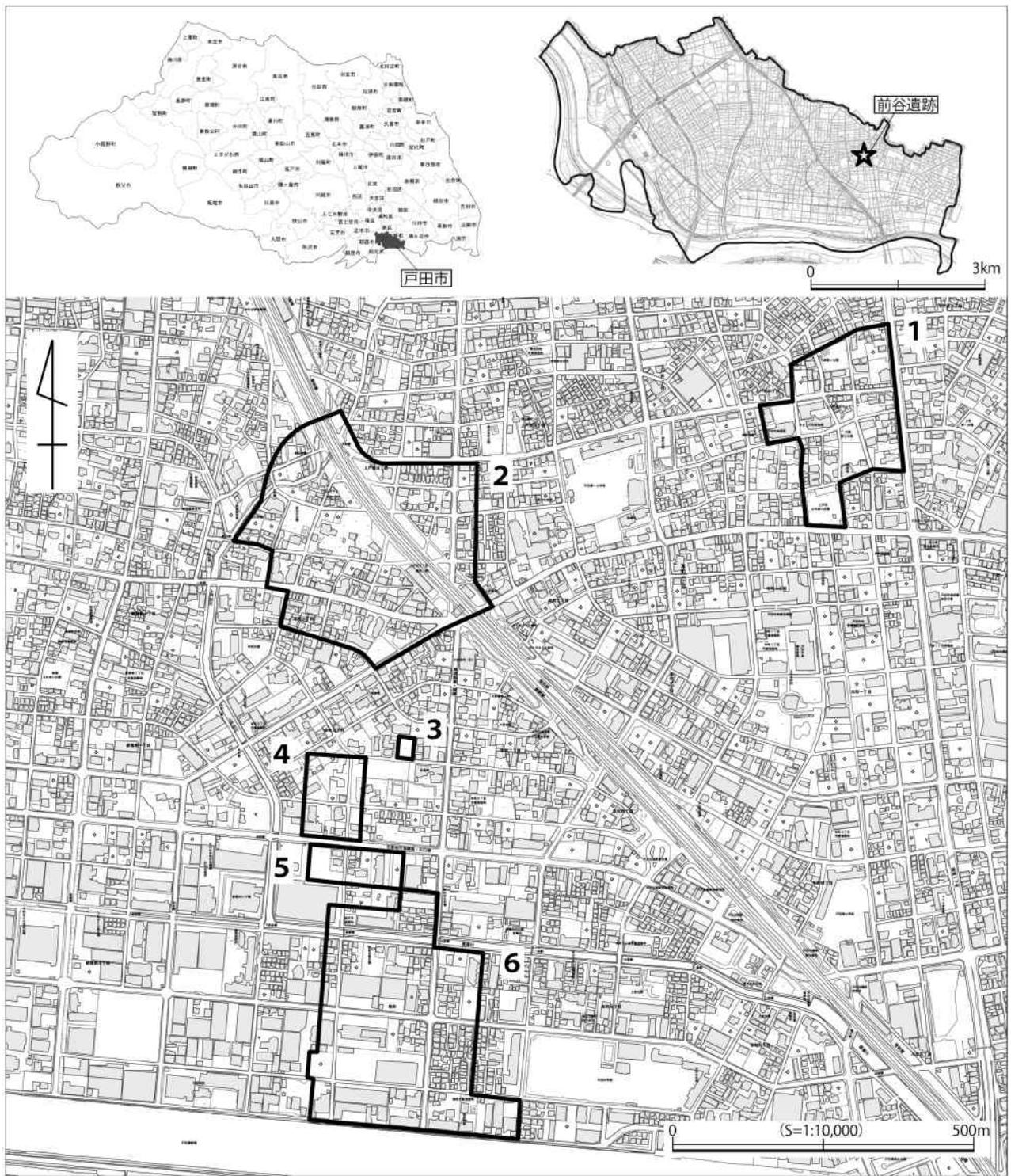
戸田市では旧石器時代の遺構・遺物は確認されておらず、過去の生活の痕跡が見え始めるのは縄文時代からである。

現在、縄文時代に帰属する遺跡は確認されていないが、縄文時代前期後葉から後期中葉までの土器片が確認されている。縄文時代前期では、堤外から前期後葉諸磯a式の破片資料1点が出土しており、本町からは前期末十三菩提式深鉢形土器の大型破片1点が出土している。縄文時代中期は、中葉から後葉にかけての遺物が出土している。鍛冶谷・新田口遺跡では勝坂式や加曾利E式の破片資料の出土が報告されており、南原遺跡などでも阿玉台式や加曾利E式期の土器片が微量ながら検出されている。縄文時代後期は、中葉から後葉にかけての遺物が検出されている。鍛冶谷・新田口遺跡では堀之内式、加曾利B式の土器片が出土しており、堤外からも同型式期に帰属する土器破片が出土している。

縄文時代後期後葉から弥生時代中期にかけての遺構・遺物は確認されていないが、弥生時代後期から古墳時代前期になると、戸田市域の微高地上に多くの遺跡が形成されるようになる。弥生時代後期から古墳時代前期では、前谷遺跡、鍛冶谷・新田口遺跡、南町遺跡、南原遺跡、上戸田本村遺跡、根木橋遺跡で遺構・遺物が検出されている。この中でも昭和51年に埼玉県選定重要遺跡に選



第2図 戸田市域の地形



第3図 前谷遺跡及び周辺の遺跡位置図

第1表 前谷遺跡周辺遺跡の概要

No.	遺跡名	所在地	種別	時代	立地
1	前谷遺跡	戸田市上戸田2丁目	集落跡・城館跡	弥生後期・古墳前期・平安・鎌倉・南北朝・室町	微高地
2	鍛冶谷・新田口遺跡	戸田市上戸田3・5丁目、本町3丁目、大字新曾	集落跡	弥生後期・古墳前期	微高地
3	大前遺跡	戸田市本町3丁目	集落跡	古墳前期・平安・南北朝・室町	微高地
4	上戸田本村遺跡	戸田市本町3丁目	集落跡・円墳	古墳後期	微高地
5	南町遺跡	戸田市南町	集落跡	古墳前期	微高地
6	南原遺跡	戸田市南町	集落跡・円墳	弥生後期・古墳前/後期・奈良・平安・鎌倉	微高地

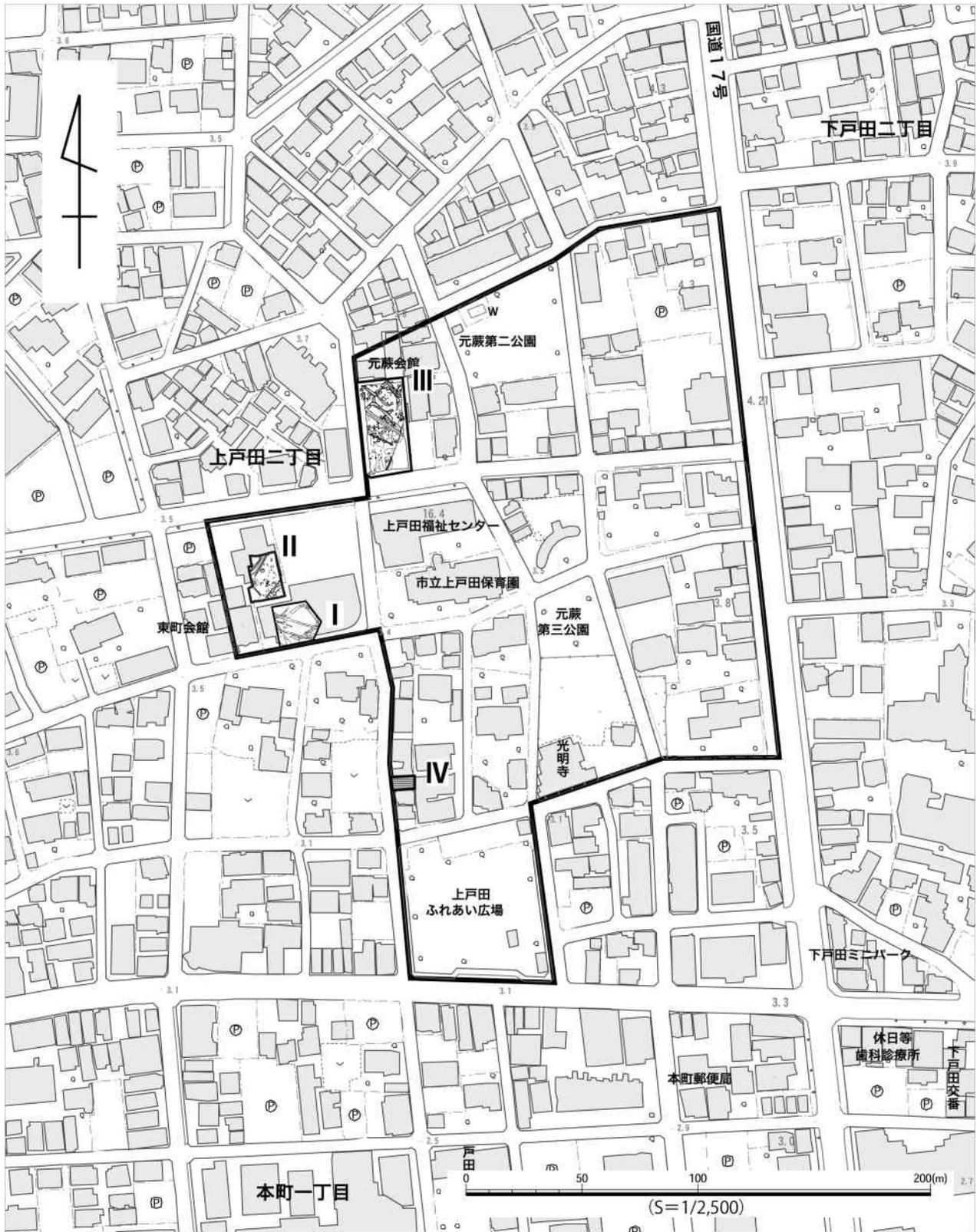
定された鍛冶谷・新田口遺跡は、当該期の方形周溝墓（周溝状遺構）群や集落跡、木器の出土などから全国的に有名である。上戸田本村遺跡では、2次・3次調査において環濠と思われる溝状遺構と、溝の東部に密集する竪穴住居群を検出しているため、上戸田本村遺跡周辺に当該期の環濠集落が存在した可能性が高い。

古墳時代中期の遺構・遺物が検出された遺跡は少なく、南原遺跡2次調査B区で住居跡3軒、9次調査で井戸跡1基、10次調査で住居跡1軒と土坑2基が確認されたのみである。

古墳時代後期は、上戸田本村遺跡や南原遺跡周辺で群集墳が形成される時期である。上戸田本村遺跡内にはかつて「くまん塚」と呼ばれた古墳が所在した。「くまん塚」は円墳で、墳丘の盛り土が僅かに残存しており、そこから横穴式石室の石材の一部と直刀2振が出土している。また、上戸田本村遺跡では1次調査において鬼高式期の住居跡2軒、4次調査において馬形埴輪や人物埴輪、円筒埴輪が出土した古墳周溝が1基検出されている。また、南原遺跡では、2次調査A区で円形周溝墓（円墳）1基、3次調査D区で鬼高式期の住居跡1軒と屋外竈1基、4次調査で円形周溝墓（円墳）2基、6次調査で円形周溝墓（円墳）1基、9次調査で馬形埴輪、人物埴輪、家形埴輪、円筒埴輪等が出土した古墳周溝が2基検出されている。

平安時代は、南原遺跡や鍛冶谷・新田口遺跡、前谷遺跡で竪穴住居や井戸跡、土坑群、ピット列が検出されている。

中世は、市の西部からさいたま市の南西部の地域がかつての佐々目郷（篠目・笹目）に該当し、鶴岡八幡宮の社領であったことが文献史料からわかっている。当該期では、大前遺跡や前谷遺跡、上戸田本村遺跡、南原遺跡、南町遺跡、美女木八幡社脇遺跡で掘立柱建物跡や溝状遺構、井戸跡が検出されている。前谷遺跡や南原遺跡、上戸田本村遺跡からは断面が葉研状の溝状遺構が検出されていることから、『新編武蔵国風土記稿』の桃井播磨守の居城であったとされる「蕨城」「戸田の御所」との関連が指摘されるが、未だその明確な位置や検出された遺構との関係性については明らかになっていない。



- |     |                  |                               |
|-----|------------------|-------------------------------|
| I   | 第1次調査(1972)      | : 戸田市教育委員会調査(伊藤1978)          |
| II  | 第2次調査(2007)      | : 戸田市教育委員会調査                  |
| III | 第3次調査(2011)      | : 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査(赤熊2012) |
| IV  | 第4次調査(2011~2012) | : 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査(未報告)    |

第4図 前谷遺跡調査区位置図

### 第3節 遺跡・調査の概要

前谷遺跡は JR 埼京線戸田公園駅から北東約 700m の戸田市上戸田 2 丁目地内に所在する。遺跡周辺には「櫓構」、「竹ノ内」、「左衛門屋敷」、「雑色」、「元蔵」等の地名が古くから残っており、土塁の一部であった可能性がある地膨れ状の地形が残存していたことから、かつて「蔵城」が存在した可能性が指摘されている。

本遺跡は、昭和 47 年の第 1 次発掘調査から、これまでに 4 次にわたる発掘調査が実施されている。

第 1 次発掘調査は、昭和 47 年 8 月 23 日から 9 月 6 日までの期間で、店舗建設に伴う緊急発掘調査として市教育委員会が実施した。検出した遺構は、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の周溝状遺構 2 基と平安時代から中世の溝状遺構 8 条などである。遺物は、周溝状遺構から複合口縁を有する壺形土器や台付甕形土器、広口壺形土器、高坏形土器などが出土しており、溝状遺構からは、報告者によって 10 世紀代に比定された灰釉陶器や須恵器、土師器などが検出されている。また、第 4 溝は断面形状が薬研状を呈していることから、中世城館の堀であった可能性が指摘されている。

第 3 次発掘調査は、平成 23 年 12 月 1 日から平成 24 年 1 月 31 日までの期間で、戸建分譲住宅建設に伴う緊急発掘調査として、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。検出した遺構は、古墳時代前期の周溝状遺構や井戸跡、古墳時代後期の土坑、平安時代の土坑、井戸跡、溝跡、ピット、中・近世の溝跡、井戸跡などである。周溝状遺構 6 基からは、複合口縁を有する壺形土器や甕形土器、台付甕形土器、無頸壺などが出土している。また、古墳時代後期の土坑からは、赤彩された比企型の坏や須恵器模倣坏などが出土している。平安時代以降では、土坑や井戸跡、溝跡から 8～9 世紀の東金子や南比企、末野産の須恵器、中世の常滑焼、近世の天目茶碗等が出土している。

本調査区は、前谷遺跡の西部に位置し、東側へと延びる微高地の西端部付近に立地する。地表面の標高は約 3.6m、遺構確認面の標高は約 3.0m である。基本土層については発掘調査段階で観察していないため不明であるが、地山表層は粘性・しまりがいずれも強い黄褐色粘土層であったと記録される。

本調査区からは、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の周溝状遺構 2 基、平安時代の掘立柱建物跡 1 棟、溝跡 3 条、中世の溝跡 2 条、井戸跡 2 基、土坑 1 基、その他時期不明であるが中世に帰属する可能性がある柵列 4 列、土坑 4 基、ピット 43 基を検出した。出土遺物は、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の土器、平安時代の土師器、須恵器、中世の陶器、漆器、板碑、その他土製紡錘車や砥石などが出土した。これらの中でも詳細な時期・産地は不明であるが、第 5 号溝跡から出土した線刻画が施された須恵器瓶の破片資料は、他に類例が少ないという点で特筆することができる。



第5図 調査区全体図

# 第3章 検出された遺構と遺物

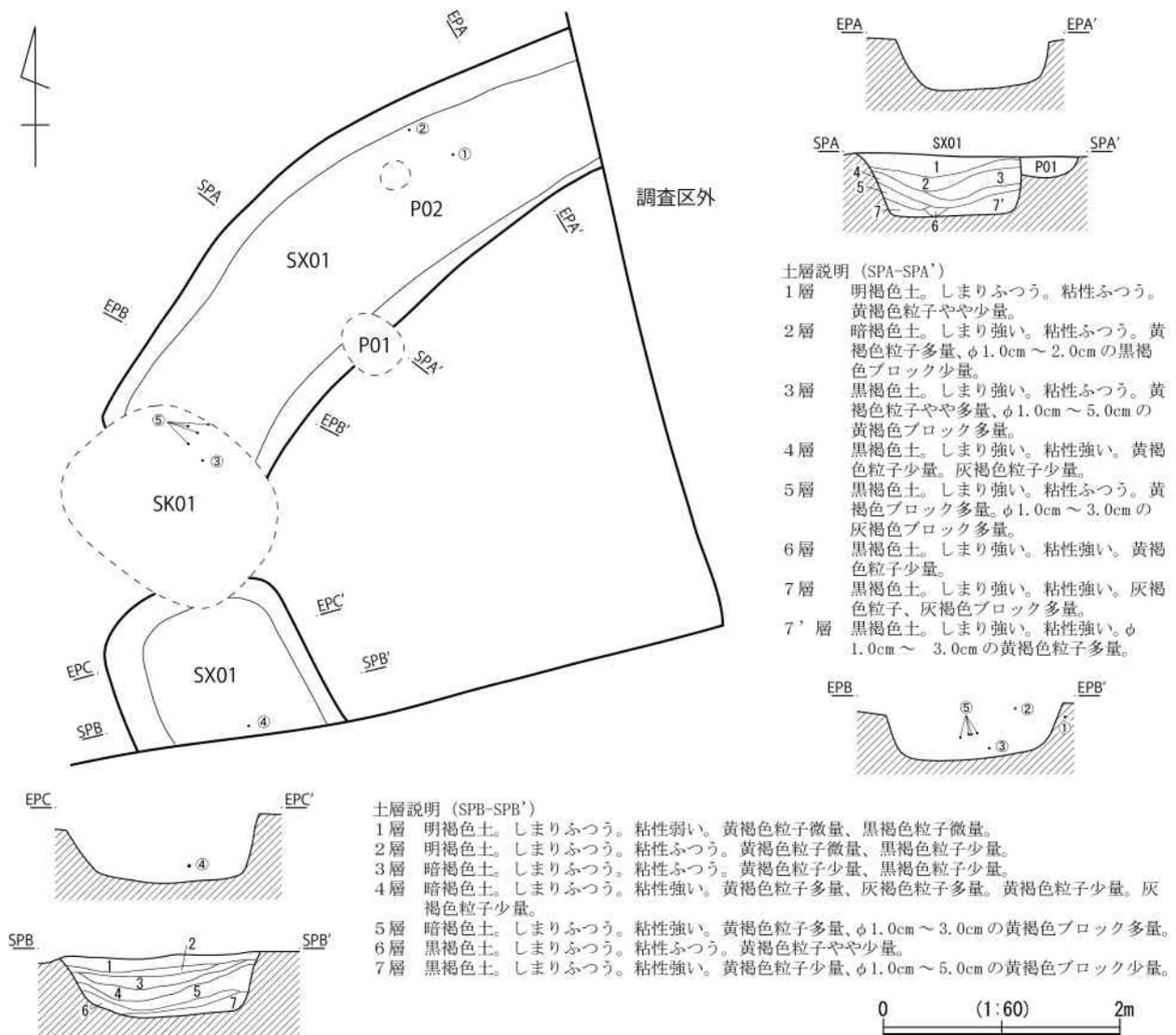
## 第1節 弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭

### 1 周溝状遺構

#### 第1号周溝状遺構－SX01

遺構（第6図 図版1－2）

位置：D～F－4・5グリッド。重複関係：P01、P02、SK01に切られる。平面形・規模：東側と南側が調査区外へと続くため推測を含むが、各辺がやや弧状となる隅丸方形を呈すると思われる。周溝幅から推測される推定全長は10.0m～15.0m程度。北西角に開口部を有する。主軸方位：N－45°－W。周溝：北西角で途切れる。断面形は逆台形で、底面はほぼ水平であるが、外側へ向かってやや傾斜を持つ。壁は急斜度で立ち上がる。上端幅1.20m～1.68m、下



第6図 第1号周溝状遺構実測図 (SX01)

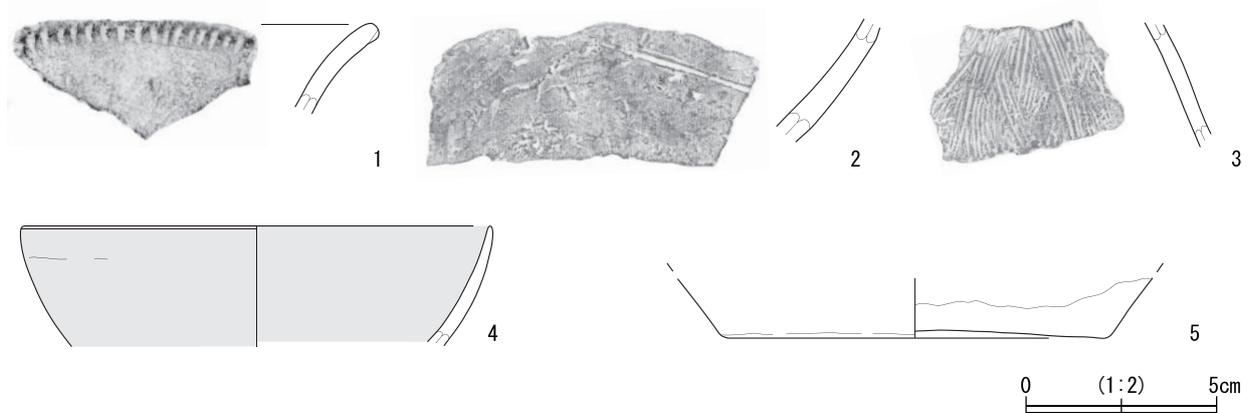
端幅 0.92m ~ 1.12m、確認面からの深さ 0.50m 前後。覆土：SPA-SPA'、SPB-SPB' の 2 箇所で断面を観察しているが、各断面における層の対応関係は不明。上層の方が明度が高く、下層の方が明度が低くなるようである。堆積状況から自然堆積によるものと考えられる。

遺物（第 7 図 図版 4）

出土状況：本遺構からは全部で 67 点、319g の土器片が出土した。埴形土器、平底甕形土器、台付甕形土器、壺形土器があるが、いずれも小破片であり復元可能なものはない。これらのうち図示したものは 5 点である。出土土器の全てが弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭に比定できるものである。

時期

出土遺物から弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭。



第 7 図 第 1 号周溝状遺構出土遺物実測図

第 2 表 第 1 号周溝状遺構出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	出土 遺構	種別 器種	部位	法量(cm) 口径 器高 底径	重量	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
7-1 4-SX01-1	SX01	土師器 甕形	口縁部	—	11g	口唇部に幅2mm程度の刻み列。	φ 1mm以下白色粒子極微量	良	外—にぶい黄橙(10YR6/4) 内—赤褐(10R4/4)	内外面赤彩
7-2 4-SX01-2	SX01	土師器 壺形	胴下部	—	25g	幅1mm程度斜方向沈線。輪積成形。	φ 1mm以下白色粒子極微量 φ 1mm以下石英粒子微量	良	外—黒褐(10YR3/2) 内—灰黄褐(10YR5/2)	破断面輪積成形痕
7-3 4-SX01-3	SX01	土師器 台付甕形	脚台部	—	12g	刷毛による器面調整(縦位)。	φ 1mm以下白色粒子微量	やや良	外—にぶい黄褐(10YR5/4) 内—黒(10YR2/1)	
7-4 4-SX01-4	SX01	土師器 埴	口縁部	[12.3cm] —	5g	丁寧なナデによる器面調整。	φ 1mm以下黒色粒子微量 φ 1mm以下白色粒子極微量	良	外—灰黄(2.5Y6/2) 内—にぶい黄(2.5Y6/3)	内外面赤彩
7-5 4-SX01-5	SX01	土師器 壺形	底部	— [10.4cm]	16g	上げ底。底面に指頭圧痕か？	φ 2mm程度褐色粒子中量 φ 1mm以下黒色粒子少量	良	外—浅黄(2.5Y7/3)	内面剥落

## 第2号周溝状遺構－SX02

遺構（第8図 図版1－3）

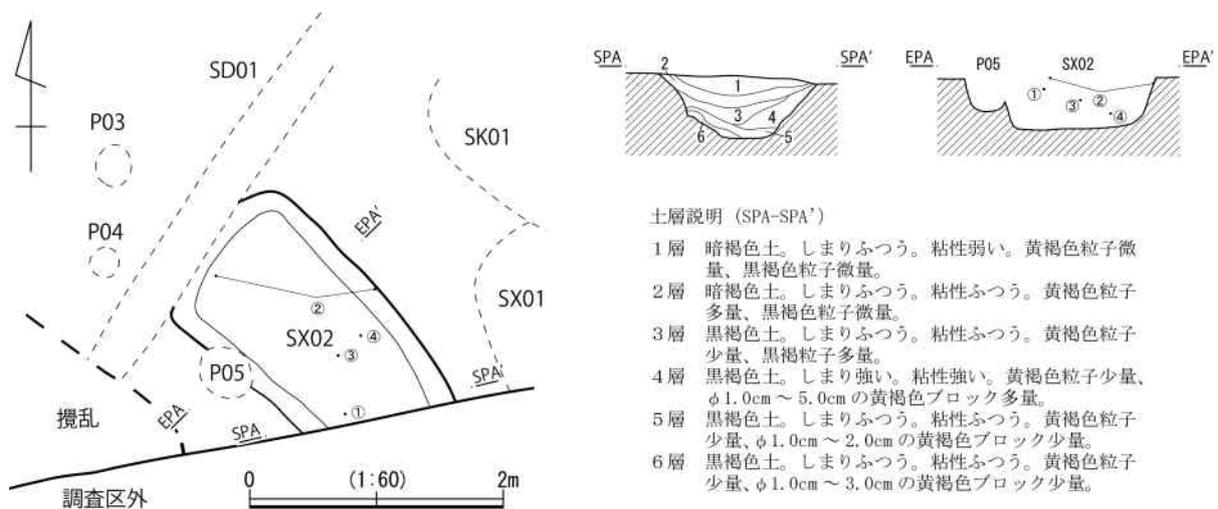
位置：E～F－3・4グリッド。重複関係：SD01、P05に切られる。平面形・規模：本遺構は発掘調査段階では土坑と認識されていたが、SX01との類似性と出土遺物から周溝状遺構と判断した。南側が調査区外へと続くため、全体の形状は不明である。周溝幅から推測される推定全長は10.0m～15.0m程度。北西方向に開口部を有するものと考えるが、詳細は不明である。周溝：断面形は周溝の端部では逆台形で、中ほどでは箱葉研形となる。底面はほぼ水平であり、壁は周溝端部へ向かうにつれて斜度を増す。上端幅1.20m～1.16m、下端幅0.80m～1.00m、確認面からの深さ0.50m前後。覆土：全部で6層に分層した。上層の方が明度が高く、下層の方が明度が低くなる。4層に1.0cm～5.0cmの黄褐色ブロックの流れ込みによる層が確認されているため、方台部あるいは土堤部が確認した周溝の東側に存在した可能性が考えられる。堆積状況から自然堆積によるものと考えられる。

遺物（第9図 図版4）

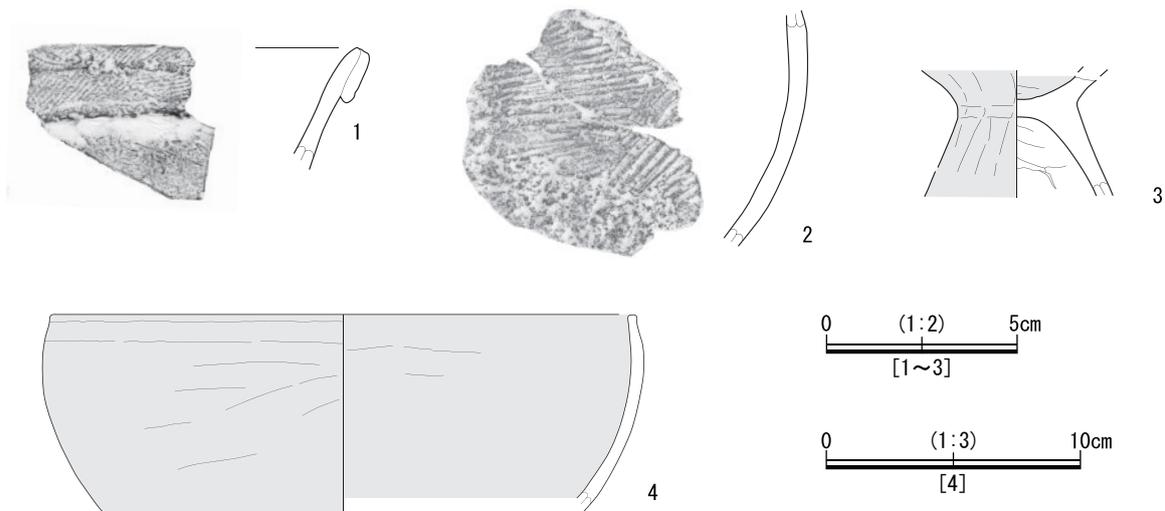
出土状況：本遺構からは全部で4点、146gの土器片が出土した。壺形土器1点、高环形土器1点、甕形土器1点、鉢形土器1点である。4点全てを図示した。出土土器の全てが弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭に比定できるものである。

時期

出土遺物から弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭。



第8図 第2号周溝状遺構実測図（SX02）



第9図 第2号周溝状遺構出土遺物実測図

第3表 第2号周溝状遺構出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	出土遺構	種別 器種	部位	法量(cm) 口径 器高 底径	重量	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
9-1 4-SX02-1	SX02	土師器 壺形	口縁部	—	13g	複合口縁。口唇部・口縁部隆帯上に 単節RL縄文縦位施文。丁寧なナデ による器面調整。	φ1mm以下白色粒子微量 φ1mm以下石英粒子極微量	やや 良	外—灰黄褐(10YR4/2) 内—灰黄褐(10YR5/2)	内外面赤彩
9-2 4-SX02-2	SX02	土師器 甕形	胴下部	—	30g	刷毛による器面調整(横位・斜位)。	φ1mm程度白色粒子少量 φ1mm以下黒色粒子微量	やや 良	外—黒褐(2.5Y3/2) 内—にぶい黄褐(10YR6/3)	外面剥落
9-3 4-SX02-2	SX02	土師器 高坏形	坏底部 ～脚部	—	37g	丁寧なナデによる器面調整。	φ1～2mm程度砂粒極微量 φ1mm以下白色粒子微量	良	外—にぶい赤褐(2.5YR4/4) 内(坏部)—にぶい赤褐 (2.5YR4/4) 内(台部)—にぶい黄橙 (10YR6/3)	坏部内外面・ 台面外面赤彩
9-4 4-SX02-2	SX02	土師器 鉢形	口縁部 ～胴部	[25.6cm] — —	66g	丁寧なナデによる器面調整。	φ1mm以下白色粒子少量 φ1mm以下黒色粒子微量 φ1mm以下褐色粒子極微量	良	外—浅黄(2.5Y7/3) 内—浅黄(2.5Y7/3)	内外面赤彩

## 第 2 節 平安時代以降の遺構と遺物

### 1 掘立柱建物跡

#### 第 1 号掘立柱建物跡－SB01

遺構（第 10 図 図版 2－1）

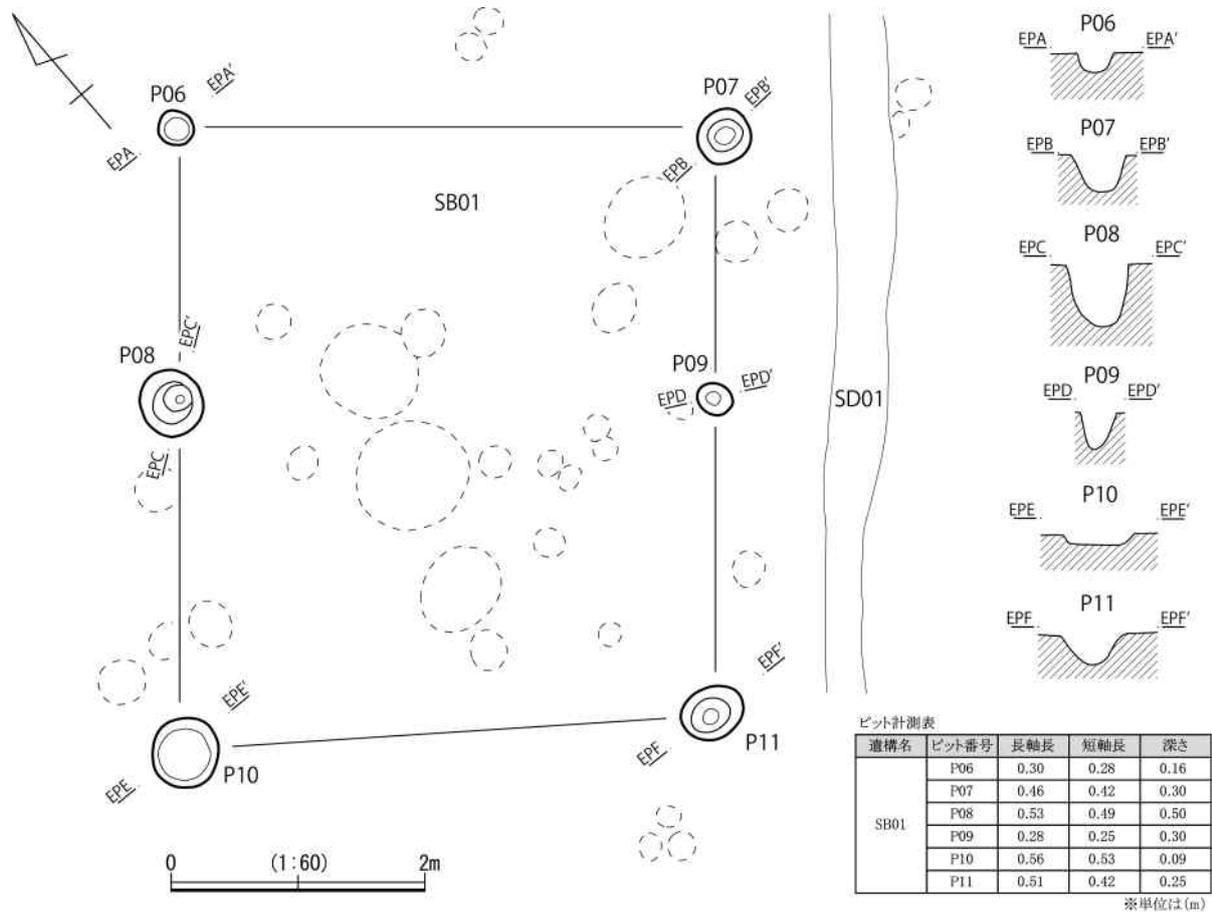
位置：C～E－2～4 グリッド。建物形式：桁行 2 間 × 梁行 2 間の側柱建物。桁行総長 4.95m、梁行総長 4.25m、面積約 20 m<sup>2</sup>。柱間は P06-P07・P10-P11 が 4.25m、P06-P08・P07-P09 が 2.15m、P08-P10 が 2.80m、P09-P11 が 2.50m である。主軸方位：N－48°－E。柱穴：6 基の柱穴を検出した。長・短軸長は 0.25m～0.56m とややばらつきがあるが、いずれも円形を呈する。確認面からの深さは 0.09m～0.50m であり一定ではない。備考：本遺構は、整理作業の段階で掘立柱建物跡と認定したものである。発掘調査段階では覆土の観察は行っていないため、堆積状況等は不明である。

遺物

出土状況：全部で 3 点（6 g）が出土した。P07 から須恵器片 1 点、P11 から土器片 1 点、P57 から土器片 1 点が出土しているが、小破片のため図示できなかった。

時期

第 1～3 号溝跡との関連性から平安時代（9c 頃）と考えられる。



第 10 図 第 1 号掘立柱建物跡実測図（SB01）

## 2 溝跡

### 第 1 号溝跡－SD01

遺構（第 12 図 図版 1－5）

位置：D～F－3～5 グリッド。重複関係：SX02 を切る。主軸方位：N－39°－E。規模・形状：調査区内ではほぼ直線状に検出され、南西部にて SD02 に接続するものと考えられる。断面形は逆台形～U 字形を呈する。調査区内で確認された長さは 10.40m であり、上端幅 0.30m～0.50m、下端幅 0.15m～0.33m、確認面からの深さは 0.10m 前後である。覆土：全部で 2 層に分層した。自然堆積か埋め戻しによるものかは不明。備考：SD02 と直角に交わり、SD03 と平行に延びるため、同時期に区画溝として機能していたものと推測される。

遺物（第 11 図 図版 4）

出土状況：本遺構からは全部で 3 点、19g の土器片が出土した。このうち古墳時代中期に属する可能性がある高环形土器 1 点を図示した。他の全てが弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭に帰属すると考えられるが、いずれも流れ込みによるものと考えられる。

時期

第 2・3 号溝跡との関連性から平安時代（9c 頃）と考えられる。



第 11 図 第 1 号溝跡出土遺物実測図

第 4 表 第 1 号溝跡出土遺物観察表

挿図番号	出土遺構	種別器種	部位	法量(cm) 口径 器高 底径	重量	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
11-1	SD01	土師器 高环形	脚部	—	14g	ナデによる器面調整。	φ 1mm以下白色粒子中量 φ 1mm以下黒色粒子中量 φ 2～5mm小石微量	やや 良	外—にぶい橙(7.5YR6/4) 内—橙(5YR6/6)	内面裾部接地痕
4-SD01-1				[13.9cm]						

### 第 2 号溝跡－SD02

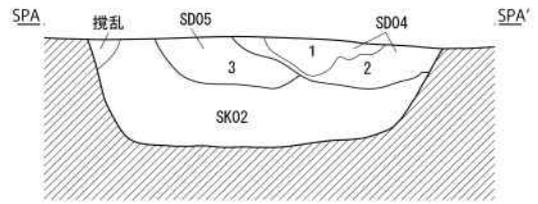
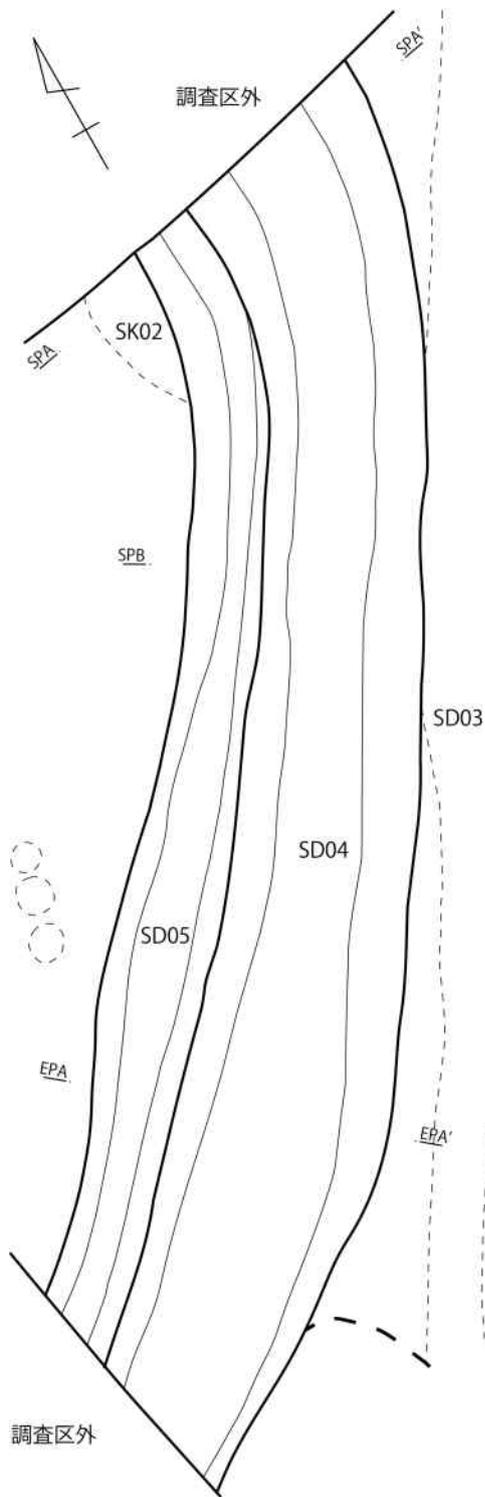
遺構（第 12 図 図版 2－2）

位置：E－2 グリッド。重複関係：SE02 と重複するが新旧関係は不明。主軸方位：N－43°－W。規模・形状：調査区内ではほぼ直線状に検出され、北西部にて SD03 に、南東部にて SD01 に接続するものと考えられる。断面形は U 字形を呈する。調査区内で確認された長さは 5.65m であり、上端幅 0.49m～0.79m、下端幅 0.20m～0.55m、確認面からの深さは 0.35m 前後である。覆土：発掘調査段階で確認していないため不明。備考：SD01・SD03 と直角に交わるため、同時期に区画溝として機能していたものと推測される。

遺物

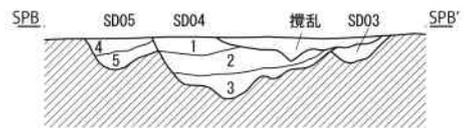
出土状況：本遺構からは全部で 4 点、38g の土器片が出土した。このうち 1 点は恐らく 9 世





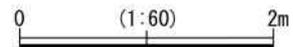
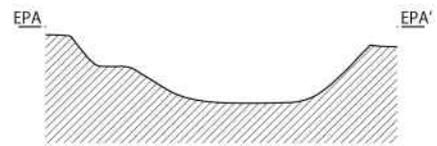
土層説明 (SPA-SPA')

- 1層 明灰褐色土。しまりふつう。粘性弱い。黄褐色粒子微量、灰褐色粒子少量。
- 2層 明灰褐色土。しまりふつう。粘性弱い。黄褐色粒子少量、φ1.0cm～5.0cmの黄褐色ブロック多量、灰褐色粒子少量、黒褐色粒子少量、φ1.0cm～3.0cmの黒褐色ブロック少量。
- 3層 暗灰褐色土。しまりふつう。粘性ふつう。黄褐色粒子少量、灰褐色粒子微量、黒褐色粒子少量。



土層説明 (SPB-SPB')

- 1層 明褐色土。しまりふつう。粘性弱い。黄褐色粒子少量、灰褐色粒子微量。
- 2層 明褐色土。しまりふつう。粘性弱い。黄褐色粒子多量、灰褐色粒子多量。
- 3層 暗褐色土。しまりふつう。粘性ふつう。黄褐色粒子多量、灰褐色粒子多量、φ1.0cm～2.0cmの灰褐色ブロック多量。
- 4層 明褐色土。しまりふつう。粘性弱い。黄褐色粒子微量、灰褐色粒子微量。
- 5層 明褐色土。しまりふつう。粘性弱い。黄褐色粒子微量、灰褐色粒子少量。



第 13 図 第 4・5号溝跡実測図 (SD04・SD05)

紀代のものと考えられる須恵器片、3点は弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭に比定できるものであるが、小破片のため図示できなかった。弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭に帰属する土器は流れ込みによるものと考えられる。

#### 時期

出土遺物および第1・3号溝跡との関連性から平安時代（9c頃）と考えられる。

### 第3号溝跡－SD03

遺構（第13図 図版2－3）

位置：A～C－1～3グリッド。重複関係：SD04に切られる。主軸方位：N－30°－E。  
規模・形状：調査区内ではほぼ直線状に検出され、南西部にてSD02に接続するものと考えられる。断面形はU字形を呈する。調査区内で確認された長さは12.00mであり、上端幅0.40m～0.65m、下端幅0.22m～0.34m、確認面からの深さは0.42m前後である。覆土：単一層であるが、自然堆積か埋め戻しによるものかは不明。備考：SD02と直角に交わり、SD01と平行に延びるため、同時期に区画溝として機能していたものと推測される。

#### 遺物

出土状況：本遺構からは全部で3点、20gの恐らく9世紀代のものと考えられる須恵器片が出土したが、小破片のため図示できなかった。

#### 時期

出土遺物および第1・2号溝跡との関連性から平安時代（9c頃）と考えられる。

### 第4号溝跡－SD04

遺構（第13図 図版2－3）

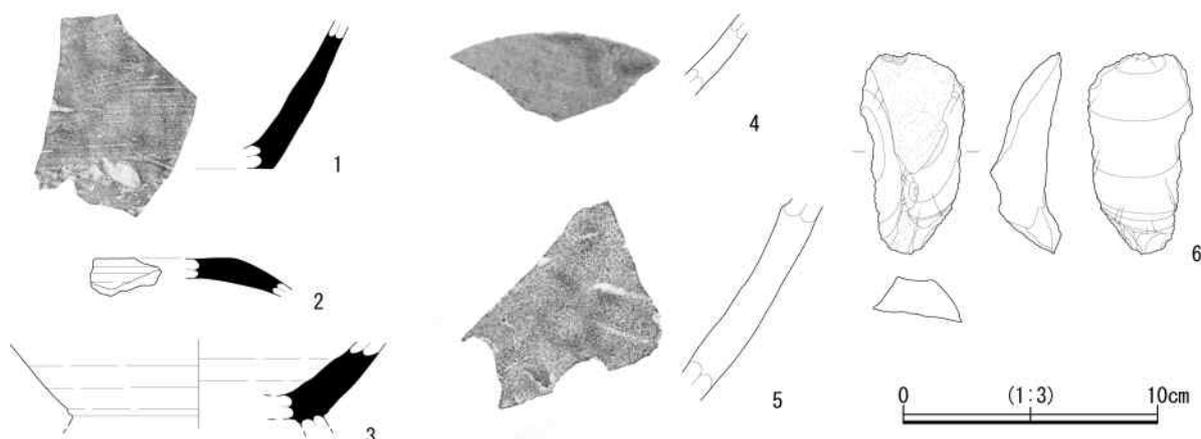
位置：A～C－1～3グリッド。重複関係：SD03、SD05、SK02を切る。規模・形状：調査区内では弧状に検出され、北側は北西方向へ、南側は南西方向へと調査区外に延びる。断面形は立ち上がりが緩やかな皿形を呈する。調査区内で確認された長さは11.40mであり、上端幅1.24m～1.73m、下端幅0.59m～1.08m、確認面からの深さは0.50m前後である。覆土：SPA-SPA'、SPB-SPB'の2箇所断面を観察しているが、各断面における層の対応関係は不明。SPA-SPA'2層は黄褐色ブロック主体であり、人為的な埋め戻しが行われたものと思われる。

遺物（第14図 図版4）

出土状況：本遺構からは全部で36点、652gの遺物が出土した。弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の土器片10点、須恵器12点、中世陶器片5点、陶磁器細片3点、砥石1点、用途不明の剥片1点、その他土器片4点である。これらのうち、6点を図示した。

#### 時期

出土遺物およびSD05との切り合い関係から中世（14c）以降。



第 14 図 第 4 号溝跡出土遺物実測図

第 5 表 第 4 号溝跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	出土遺構	種別 器種	部位	法量(cm) 口径 器高 底径	重量	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
14-1 4-SD04-1	SD04	須恵器 鉢	胴部～ 底部	—	50g	ロクロ成形。内面にナデの段有り。底部回転ヘラ削りか？	φ1mm以下白色粒子微量 白色針状物質微量	良	外—灰(N5/ 内—灰(7.5Y6/1)	南比企産 8c後
14-2 4-SD04-2	SD04	須恵器 蓋	天井部	—	15g	ロクロ成形。天井部回転ヘラ削り。	φ1mm以下白色粒子微量	良	外—灰(N6/ 内—灰(N6/)	東金子産 9c
14-3 4-SD04-3	SD04	須恵器 壺	脚台部	—	58g	ロクロ成形。底部回転糸切り後脚部取り付け。	φ1mm以下白色粒子中量 φ1mm以下黒色粒子微量 白色針状物質微量	良	外—灰(N5/ 内—灰(N6/)	南比企産 9c
14-4 4-SD04-4	SD04	陶器 鉢	胴部	—	26g	ロクロ成形。内外面施釉。	—	良	外—灰白(7.5Y7/2) 内—灰白(7.5Y7/2)	中世
14-5 4-SD04-5	SD04	陶器 甕	胴部	—	89g	外面施釉。	φ1mm以下白色粒子極微量 φ1mm程度黒色粒子極微量	良	外—灰(7.5Y6/1) 内—灰(10Y6/1)	中世
14-6 4-SD04-6	SD04	剥片	—	—	72g	—	—	—	—	石材:ホルン フェルス

## 第 5 号溝跡－ SD05

遺構（第 13 図 図版 2－3）

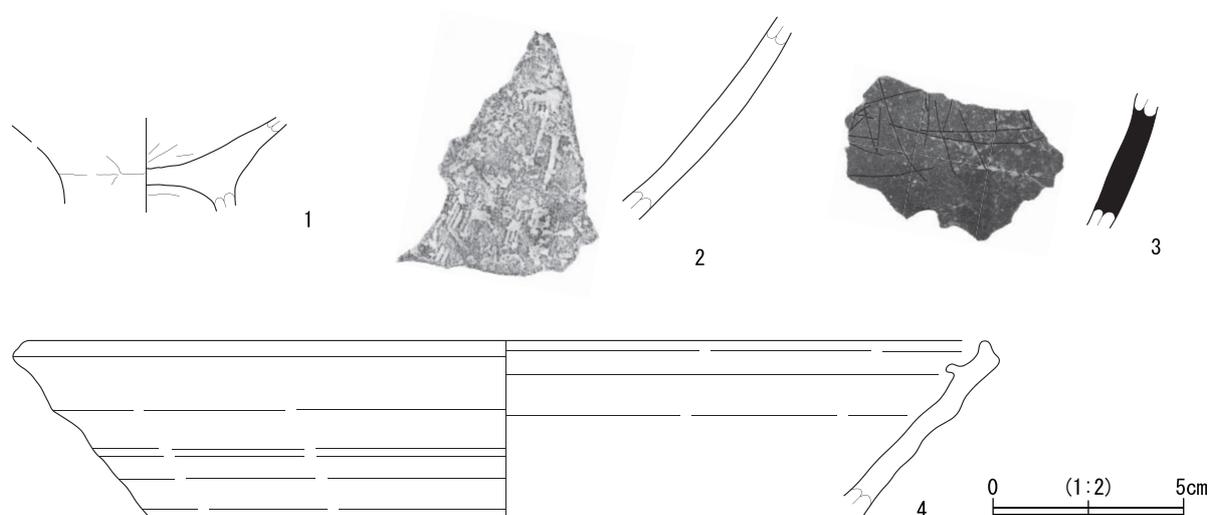
位置：A～C－1～2 グリッド。重複関係：SD04 に切られ、SK02 を切る。規模・形状：調査区内では弧状に検出され、北側は北西方向へ、南側は南西方向へと調査区外に延びる。断面形は逆台形状を呈する。調査区内で確認された長さは 9.40m であり、上端幅 0.61m～0.81m、下端幅 0.16m～0.45m、確認面からの深さは 0.40m 前後である。覆土：SPA-SPA'、SPB-SPB' の 2 箇所断面を観察しているが、各断面における層の対応関係は不明。堆積状況から自然堆積によるものと考えられる。

遺物（第 15 図 図版 5）

出土状況：本遺構からは全部で 13 点、178g の遺物が出土した。弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の土器片 10 点、須恵器片 1 点、中世陶器片 1 点である。これらのうち、4 点を図示した。3 は線刻画が施された須恵器瓶である。

## 時期

出土遺物から中世（14c 頃）。



第 15 図 第 5 号溝跡出土遺物実測図

第 6 表 第 5 号溝跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	出土 遺構	種別 器種	部位	法量(cm) 口径器高 器底径	重量	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
15-1 5-SD05-1	SD05	土師器 台付甕形	底部～ 台部	—	47g	内面指頭圧痕。外面酸化鉄付着。	φ 1mm以下白色粒子微量 φ 1mm以下褐色粒子極微量 φ 1mm以下黒色粒子中量 φ 1mm以下雲母粒子微量	やや 良	外—黄灰(2.5Y4/1) 内—灰黄褐(10YR6/2)	
15-2 5-SD05-2	SD05	土師器 壺形	胴部	—	25g	外面ヘラ調整後指ナデ。	φ 1mm以下白色粒子微量	良	外—浅黄(2.5Y7/3) 内—浅黄(2.5Y7/4)	内外面赤彩
15-3 5-SD05-3	SD05	須恵器 瓶	胴部	—	27g	ロクロ成形。内面にナデの段あり。	φ 1mm以下黒色粒子極微量	良	外—黒褐(2.5Y3/1) 内—灰(5Y5/1)	線刻画あり
15-4 5-SD05-4	SD05	陶器 鉢	口縁部	[42.1cm] — —	50g	ロクロ成形。	φ 1mm以下黒色粒子微量	良	外—灰黄褐(10YR5/2) 内—灰黄褐(10YR5/2)	常滑産 14c

## 3 柵列跡

### 第 1 号柵列跡－SA01

遺構（第 16 図 図版 1-1）

位置：D・E－4 グリッド。重複関係：SX01 を切る。SD01 と重複するが新旧関係は不明。規模・総長：総長 4.15m で、3 間分を確認した。柱間は P12-P13 が 1.34m、P13-P02 が 1.70m、P10-P11 間が 1.41m である。主軸方位：N－5°－E。柱穴：4 基の柱穴を検出した。長・短軸長は 0.25m～0.55m、確認面からの深さは 0.17m～0.39m と一定ではないが、いずれも円形～略円形を呈する。備考：本遺構は、整理作業の段階で柵列跡と認定したものである。発掘調査段階では覆土の観察は行っていないため、堆積状況等は不明である。

## 遺物

出土状況：P12 から土師器片 3 点 (2g)、P13 から土師器片が 1 点 (1g) 出土しているが、流れこみによるものと考えられる。小破片のため図示できなかった。

## 時期

中世か。

## 第 2 号柵列跡－ SA02

遺構（第 16 図 図版 1－1）

位置：C～E－4 グリッド。重複関係：SB01・SD01 と重複するが新旧関係は不明。規模・総長：総長 8.86m で、4 間分を確認した。柱間は P14-P15 が 2.17m、P15-P16 が 2.39m、P16-P17 が 2.31m、P17-P18 が 2.06m である。主軸方位：N－11°－E。柱穴：5 基の柱穴を検出した。長・短軸長は 0.21 m～0.33m、確認面からの深さは 0.09m～0.36m と一定ではないが、いずれも円形を呈する。備考：本遺構は、整理作業の段階で柵列跡と認定したものである。発掘調査段階で覆土の観察を行っていないため、堆積状況等は不明である。

## 遺物

本遺構から遺物は出土していない。

## 時期

中世か。

## 第 3 号柵列跡－ SA03

遺構（第 16 図 図版 1－1）

位置：D・E－3 グリッド。重複関係：SB01・P26 と重複するが新旧関係は不明。規模・総長：総長 2.81m で、3 間分を確認した。柱間は P19-P20 が 1.12m、P20-P21 が 0.78m、P21-P22 が 0.88m である。主軸方位：N－9°－E。柱穴：4 基の柱穴を検出した。長・短軸長は 0.19 m～0.37m、確認面からの深さは 0.10m～0.49m と一定ではないが、いずれも円形を呈する。備考：本遺構は、整理作業の段階で柵列跡と認定したものである。発掘調査段階で覆土の観察を行っていないため、堆積状況等は不明である。

## 遺物

出土状況：P19 から土師器片 1 点 (2g) が出土しているが、流れこみによるものと考えられる。小破片のため図示できなかった。

## 時期

中世か。

## 第 4 号柵列跡－ SA04

遺構（第 16 図 図版 1－1）

位置：D～F－3 グリッド。重複関係：SB01 と重複するが新旧関係は不明。規模・総長：総



長 6.18m で、3 間分を確認した。柱間は P23-P24 が 2.07m、P24-P25 が 2.19m、P25-P04 間  
 が 1.94m である。主軸方位：N - 2° - W。柱穴：4 基の柱穴を検出した。長・短軸長は 0.22  
 m ~ 0.29m、確認面からの深さは 0.11m ~ 0.20m と一定ではないが、いずれも円形を呈する。  
 備考：本遺構は、整理作業の段階で柵列跡と認定したものである。発掘調査段階では覆土の観  
 察は行っていないため、堆積状況等は不明である。

#### 遺物

出土状況：P24 から土師器片 1 点（1g）が出土しているが、流れこみによるものと考えられる。  
 小破片のため図示できなかった。

#### 時期

中世か。

### 4 井戸跡

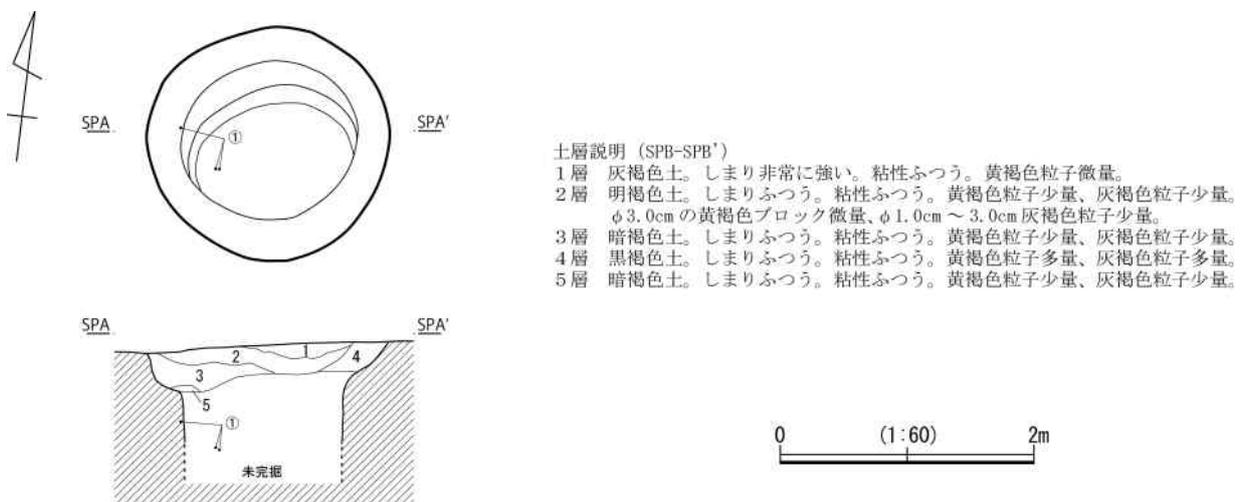
#### 第 1 号井戸跡 - SE01

遺構（第 17 図 図版 2 - 4・5、図版 3 - 1）

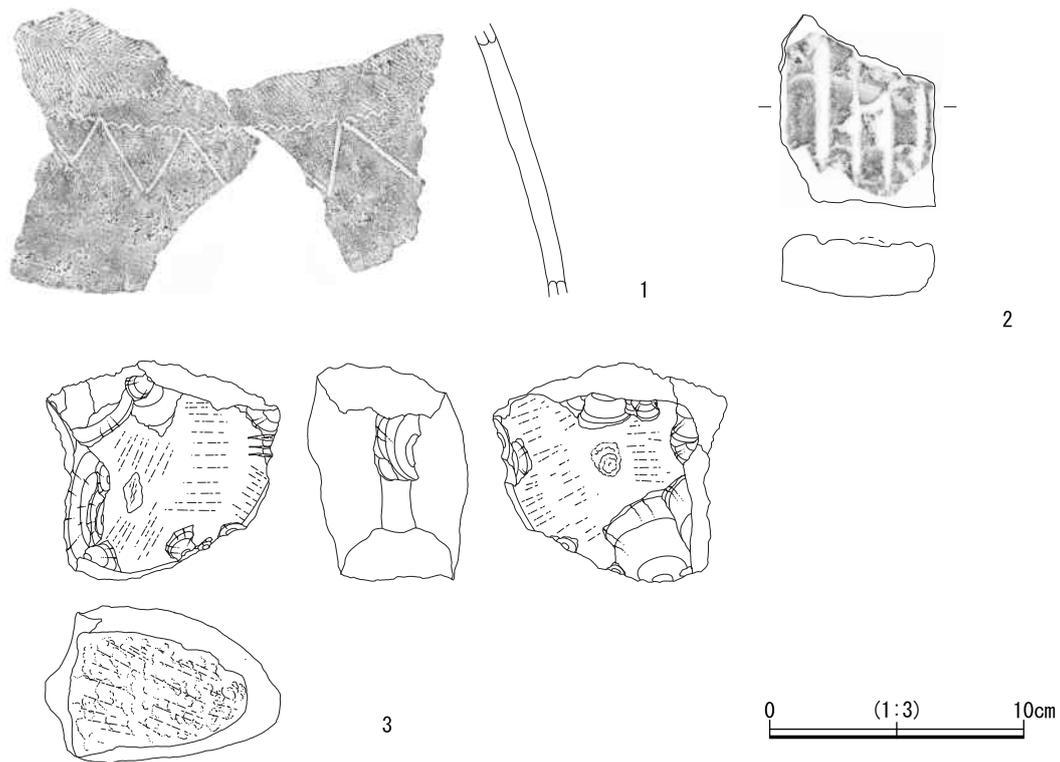
位置：C - 2・3 グリッド。規模・形状：上面の平面形は長軸 1.93m × 短軸 1.86m の略円形  
 を呈する。確認面からの深さ 0.40m ほどで北半部にテラス状の段が作られており、段からは  
 長軸 1.36m × 短軸 1.05m の楕円形の掘り込みとなる。下端形状は未完掘のため不明。覆土：覆  
 土上層部を 5 層に分層したが、テラス部以下については土層を観察していないため、自然堆積  
 か埋め戻しによるものかは不明。

遺物（第 18 図 図版 5）

出土状況：本遺構からは全部で 27 点、958g の遺物が出土した。弥生時代後期後半～古墳時  
 代前期初頭の土師器片 11 点、須恵器片 3 点、瓦 1、敲石 1 点である。これらのうち、3 点を図



第 17 図 第 1 号井戸跡実測図 (SE01)



第 18 図 第 1 号井戸跡出土遺物実測図

第 7 表 第 1 号井戸跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	出土 遺構	種別 器種	部位	法量(cm) 口径 器高 底径	重量	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
18-1 5-SE01-1	SE01	弥生土器 壺形	胴部	—	206g	0段 燃系文斜位施文→S字状結節文 →山形文。	φ1mm以下白色粒子中量 φ1mm程度赤褐色粒子微量	良	外一にぶい黄(2.5Y6/3) 内一にぶい黄橙(10YR6/3)	外面山形文以下 赤彩
18-2 5-SE01-2	SE01	平瓦か?	—	—	107g	表面に平行な沈刻を施す。	φ1~2mm以下黒色粒子中量 φ1mm以下褐色粒子 φ2~5mm程度小石微量	良	にぶい黄(2.5Y6/3)	下面剥落
18-3 5-SE01-3	SE01	敲石	—	—	580g	—	—	—	—	石材:砂岩

示した。なお、写真記録および調査参加者の証言から板碑片が出土したことがわかっているが、現在所在不明となっている。

#### 時期

出土遺物から中世。

#### 第 2 号井戸跡 - SE02

遺構 (第 19 図 図版 3 - 2)

位置: D - 2 グリッド。規模・形状: 上面の平面形は長軸 3.16m × 短軸 2.81m の略円形を呈する。確認面から 1.18m ほどで直径 1.12m ほどの円形となる。断面形は漏斗状であり、確認面からの深さ 1.18m 以下から壁は垂直となる。下端形状は未完掘のため不明。覆土: 全部で 15

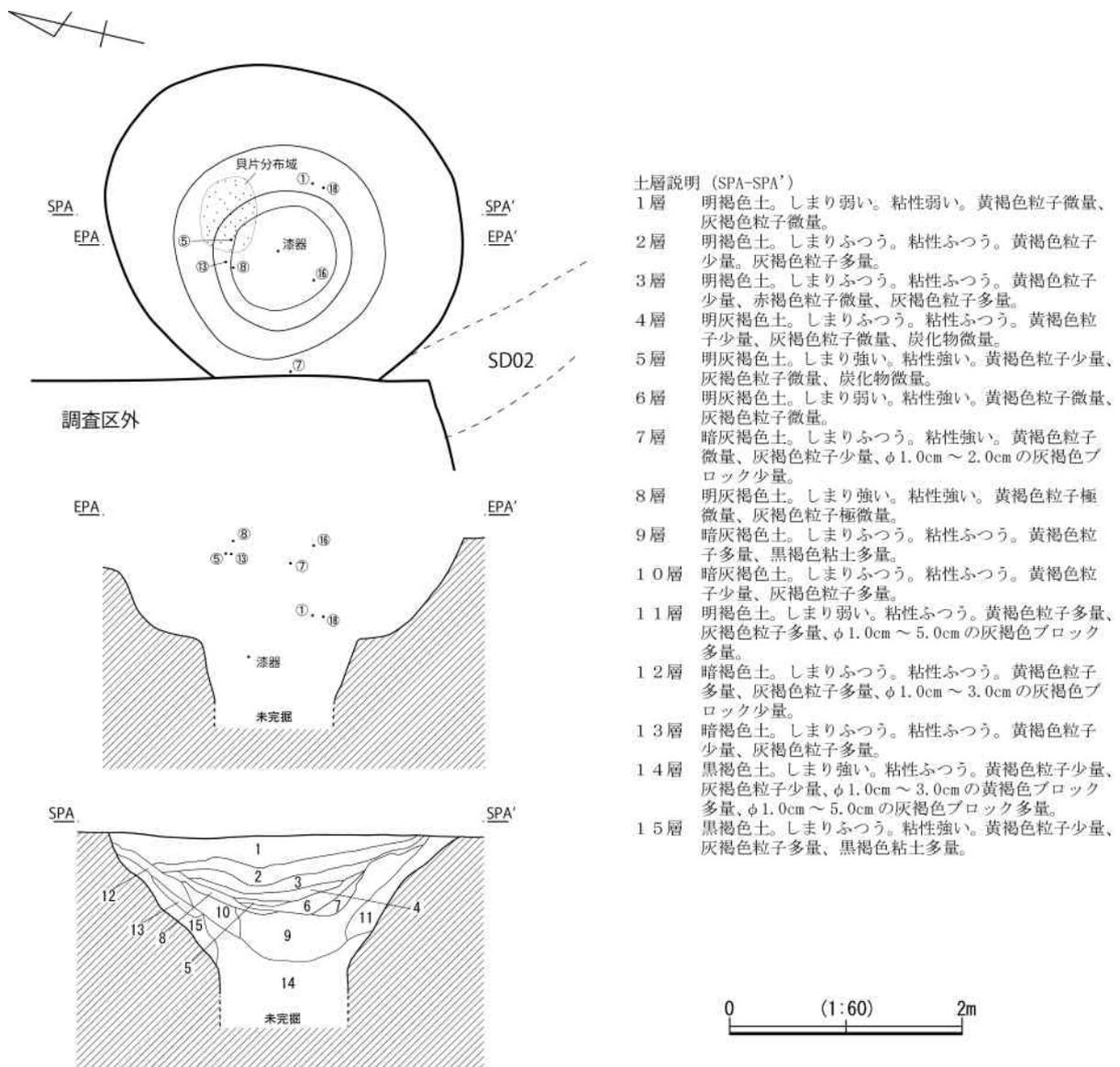
層に分層した。堆積状況から9層から下層は人為的に埋め戻したものと考えられ、8層から上層は自然堆積によるものと考えられる。なお、発掘調査時には貝片の平面分布を記録しているが、検出レベルおよび土層との整合関係、貝種等については記録を行っていないため不明である。

遺物（第19図 図版5・6）

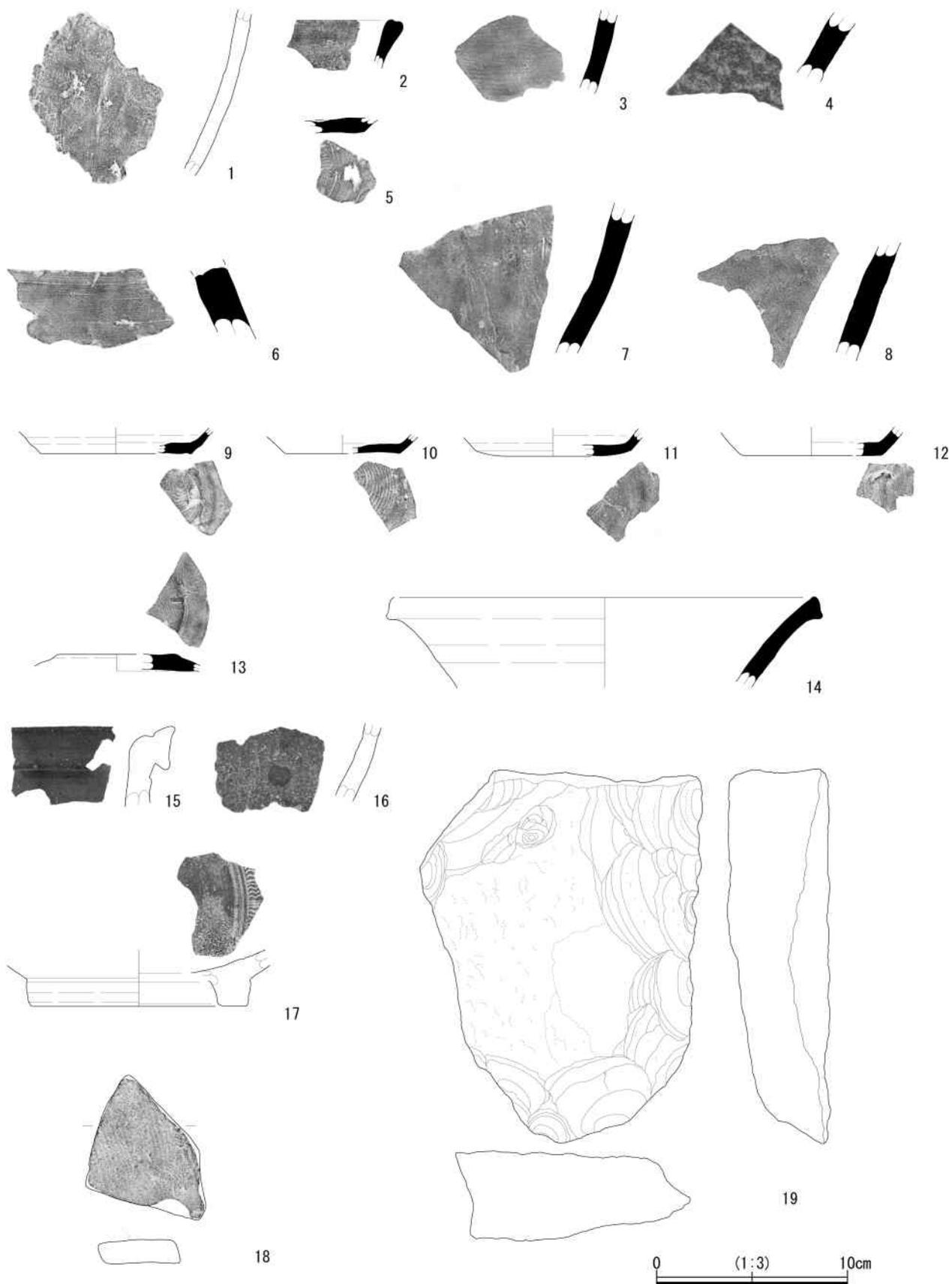
出土状況：本遺構からは全部で63点、1,235gの遺物が出土した。弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の土器片18点、須恵器片23点、陶器10点、漆器1点である。これらのうち、3点を図示した。14の須恵器はP26出土須恵器片と接合した。漆器については、発掘調査終了後に保存処理を行っていないため、現在は図化・撮影に耐え得る状態ではなくなっている。

時期

出土遺物から中世（14c頃）。



第19図 第2号井戸跡実測図 (SE02)



第 20 图 第 2 号井戸跡出土遺物实测图

第8表 第2号井戸跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	出土 遺構	種別 器種	部位	法量(cm) 口径 器高 底径	重量	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
20-1 5-SE02-1	SE02	土師器 甕形か?	胴部	—	57g	刷毛による器面調整(縦位)	φ1~3mm程度褐色粒子中量 φ1mm以下白色粒子微量 φ1mm以下黒色粒子微量	良	外—浅黄(2.5Y7/3) 内—にぶい黄橙(10YR6/3)	
20-2 5-SE02-2	SE02	須恵器 壺	口縁部	—	11g	ロクロ成形。口唇部に溝。	φ1mm以下黒色粒子少量 φ1mm以下石英微量 φ1mm以下白色粒子少量	良	外—灰(7.5Y6/1) 内—灰白(7.5Y7/1)	
20-3 5-SE02-3	SE02	須恵器 甕	胴部	—	38g	ロクロ成形。外面平行タタキ。	φ1mm以下白色粒子微量 白色針状物質微量	良	外—灰(5Y6/1) 内—灰(N5/)	南比企産
20-4 5-SE02-4	SE02	須恵器 甕	胴部	—	37g	ロクロ成形。表面自然釉。	φ1mm程度白色粒子中量 φ1mm以下黒色粒子微量	良	外—オリブ灰(7.5Y6/2) 内—黒褐(10YR3/1)	
20-5 5-SE02-5	SE02	須恵器 坏	底部	—	11g	ロクロ成形。底部回転糸切り。	φ1mm以下石英微量 φ1mm以下黒色粒子微量	良	外—灰白(2.5Y7/1) 内—灰白(5Y7/1)	東金子産 9c
20-6 6-SE02-6	SE02	須恵器 甕	胴部	—	91g	ロクロ成形。擬口縁状に剥離。自然 釉。	φ1mm以下白色粒子中量 φ1~3mm白色砂粒少量 φ1mm程度黒色粒子微量	良	外—灰(N6/) 内—灰(10Y6/)	東金子産
20-7 6-SE02-7	SE02	須恵器 甕	胴部	—	100g	外面平行タタキ後指ナデ(縦位)。	φ1mm以下白色粒子中量	良	外—灰褐(7.5YR4/2) 内—黄灰(2.5YR5/1)	東金子産
20-8 6-SE02-8	SE02	須恵器 甕	胴部	—	67g	外面丁寧なナデ。	φ1mm以下白色粒子中量 φ1mm以下黒色粒子極微量 φ1mm以下石英粒子極微量	良	外—黄灰(2.5Y5/1) 内—灰(7.5Y6/1)	東金子産
20-9 6-SE02-9	SE02	須恵器 坏	底部	— [8.8cm]	7g	ロクロ成形。底部回転糸切り。	φ1mm以下白色粒子微量 φ1mm以下石英粒子極微量	良	外—灰(7.5Y6/1) 内—灰(5Y6/1)	東金子産 8c後
20-10 6-SE02- 10	SE02	須恵器 坏	底部	— [6.7cm]	6g	ロクロ成形。底部回転糸切り。	φ1mm以下白色粒子微量 白色針状物質極微量	良	外—灰(5Y5/1) 内—灰(7.5Y5/1)	南比企産 9c
20-11 6-SE02- 11	SE02	須恵器 坏	底部	— [6.3cm]	10g	ロクロ成形。底部回転糸切り後外周 回転ヘラ削り。	φ1mm以下白色粒子中量	良	外—黄灰(2.5Y4/1) 内—褐灰(10YR4/1)	東金子産 8c後
20-12 6-SE02- 12	SE02	須恵器 坏	底部	— [8.2cm]	5g	ロクロ成形。底部回転糸切り。	φ1mm以下雲母粒子極微量 φ1mm以下黒色粒子微量 φ1mm以下白色粒子微量	良	外—灰(7.5Y6/1) 内—灰(7.5Y6/1)	東金子産 9c
20-13 6-SE02- 13	SE02	須恵器 蓋	天井部	— [6.8cm]	12g	ロクロ成形。天井部回転糸切り。	φ1mm以下黒色粒子極微量 φ1mm以下石英粒子微量	良	外—灰白(5Y7/1) 内—灰白(5Y7/1)	9c?
20-14 6-SE02- 14	SE02	須恵器 甕	口縁部	[24.5cm] — —	58g	ロクロ成形。	φ1mm以下白色粒子中量 φ1~2mm程度白色砂粒少量 白色針状物質微量	良	外—灰(10Y5/1) 内—灰(10Y5/1)	南比企産 9c
20-15 6-SE02- 15	SE02	陶器 甕	口縁部	—	68g	紐作り成形。内外面自然釉。	φ1mm以下白色粒子極微量 φ1mm程度黒色粒子中量 φ1~3mm砂粒少量	良	外—にぶい赤褐(5YR4/3) 内—にぶい赤褐(5YR4/3)	常滑産 14c
20-16 6-SE02- 16	SE02	陶器 甕	胴部	—	39g	紐作り成形。外面自然釉。	φ1mm以下白色粒子極微量 φ1mm程度黒色粒子少量 φ1~3mm砂粒少量	良	外—灰褐(7.5YR4/2) 内—灰黄(2.5Y6/2)	常滑産
20-17 6-SE02- 17	SE02	陶器 不明	底部	— [12.5cm]	58g	紐作り成形。内面弧状沈線→蛇行沈 線・平行沈線。内面施釉。	φ1~2mm褐色粒子微量	良	外—にぶい赤褐(5YR5/4) 内—浅黄(5Y7/3)	
20-18 6-SE02- 18	SE02	板状礫 不明	—	—	1053 g	—	—	—	—	石材:凝灰岩
20-19 6-SE02- 19	SE02	須恵器 転用砥石	胴部	—	62g	ロクロ成形。外面平行タタキ後指ナ デ(縦位)。破断面擦り痕。	φ1mm以下白色粒子中量 φ1~3mm褐色粒子微量 φ1mm以下石英粒子極微量	良	外—灰黄褐(10YR5/2) 内—褐灰(10YR5/1)	東金子産

## 5 土坑

### 第1号土坑－SK01

遺構（第21図 図版1－2）

位置：E－4グリッド。重複関係：SX01を切る。規模・形状：上面の平面形は長軸1.78m×短軸1.46mの隅丸長方形で、確認面からの深さ0.23mである。断面形は皿形を呈する。覆土：全部で3層に分層した。堆積状況から自然堆積によるものと考えられる。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

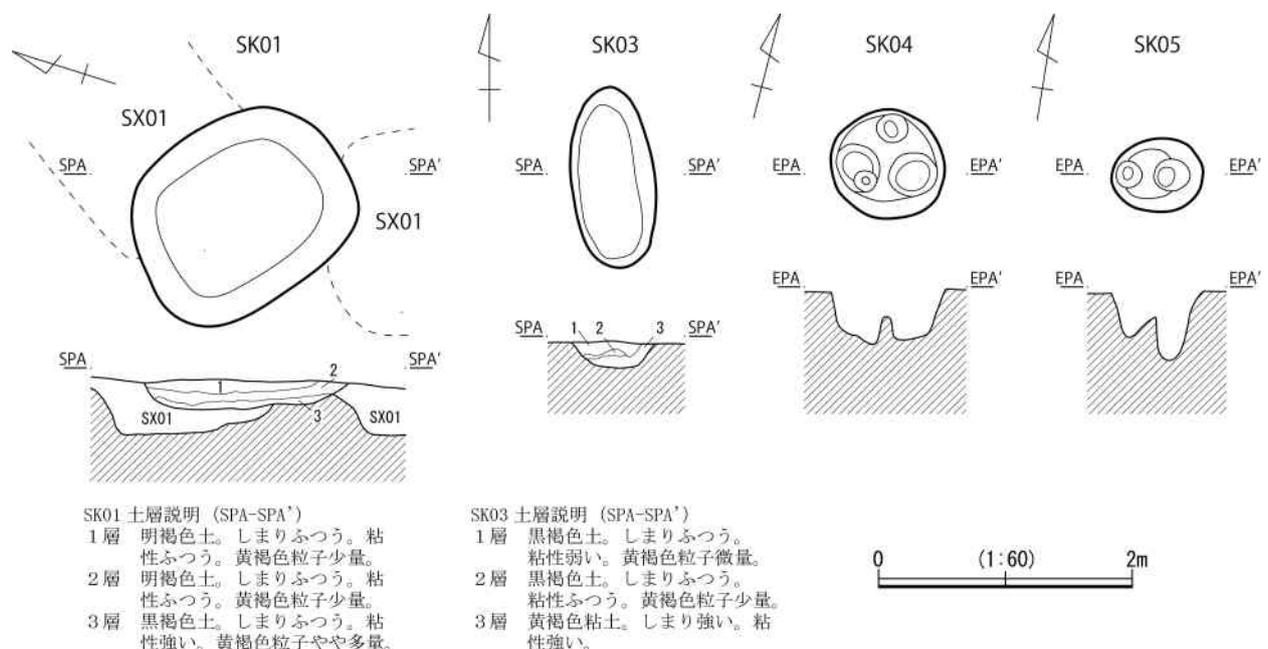
時期

不明。

### 第2号土坑－SK02

遺構（第22図 図版3－3）

位置：A－2グリッド。重複関係：SD04、SD05に切られる。規模・形状：SD04、SD05に切られるため、全体の規模は不明であるが、断面から推測すると上端幅は約2.80m程度、下端幅は約2.08m、確認面からの深さは約0.86mであったと考えられる。断面形は逆台形状を呈する。覆土：全部で4層に分層した。堆積状況から人為的な埋め戻しによるものと考えられる。備考：本遺構は発掘調査段階で「土坑」と判断されているため、本項にて扱った。東側立ち上がりラインがSD04と一致していることから、SD04やSD05と関連する溝跡である可能性がある。



第21図 第1・3・4・5号土坑実測図 (SK01・SK03・SK04・SK05)

遺物（第 23 図 図版 7）

出土状況：本遺構からは全部で 34 点、615g の遺物が出土した。弥生時代後期～古墳時代前期初頭の土器片 20 点、須恵器片 8 点、陶器 4 点、土製紡錘車 1 点、砥石 1 点である。これらのうち、9 点を図示した。

時期

出土遺物から中世（14c 頃）。

### 第 3 号土坑－SK03

遺構（第 21 図 図版 3－4）

位置：B－4 グリッド。規模・形状：上面の平面形は長軸 1.43m×短軸 0.66m の楕円形で、確認面からの深さ 0.21m である。断面形は皿形を呈する。覆土：全部で 3 層に分層した。堆積状況から人為的な埋め戻しによるものと考えられる。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

不明。

### 第 4 号土坑－SK04

遺構（第 21 図 図版 3－5）

位置：D－3 グリッド。規模・形状：上面の平面形は長軸 0.90m×短軸 0.87m の円形を呈する。確認面からの深さ 0.21m でテラスを形成し、径 0.22m～0.40m 程度のピット状の掘り込みを 4 基有する。備考：覆土断面の観察を行っていないため、土坑と掘り込みの新旧関係は不明。

遺物

出土状況：本遺構からは土師器片 1 点(2g)が出土しているが、小破片のため図示できなかった。

時期

不明。

### 第 5 号土坑－SK05

遺構（第 21 図 図版 3－6）

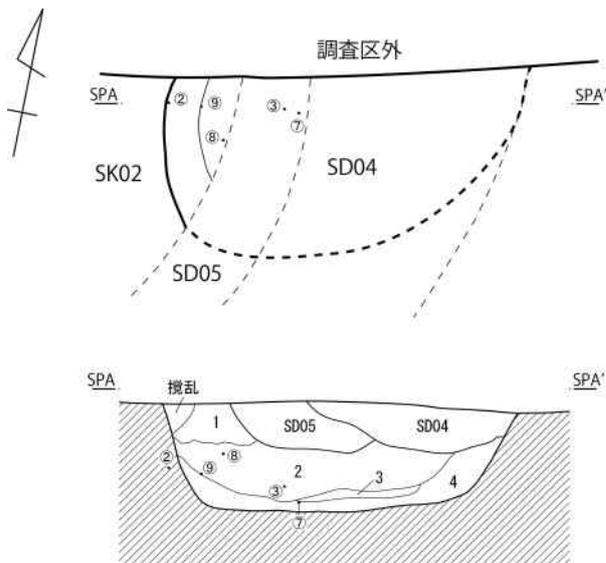
位置：D－3 グリッド。規模・形状：上面の平面形は長軸 0.72m×短軸 0.58m の円形を呈する。確認面からの深さ 0.20m でテラスを形成し、径 0.20m、0.28m のピット状の掘り込みを 2 基有する。備考：覆土断面の観察を行っていないため、土坑と掘り込みの新旧関係は不明。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

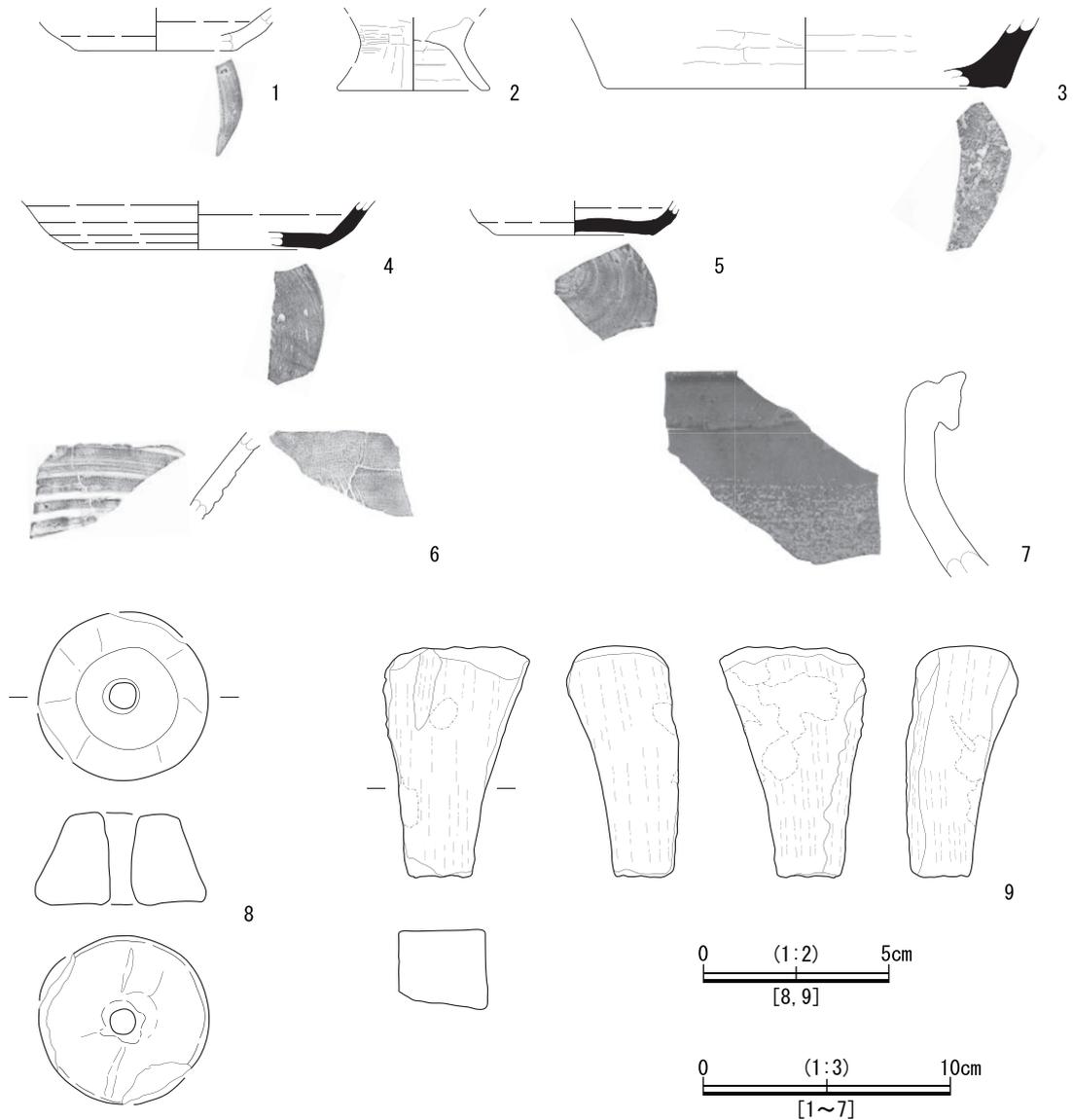
不明。



土層説明 (SPA-SPA')

- 1層 暗灰褐色土。しまりふつう。粘性ふつう。黄褐色粒子少量、灰褐色粒子多量、φ1.0cm～3.0cmの灰褐色ブロック多量。
- 2層 黒褐色土。しまりふつう。粘性ふつう。黄褐色粒子少量、灰褐色粒子少量、黒褐色粒子を少量φ1.0cm～2.0cmの灰褐色ブロック、黒褐色ブロック、黄褐色ブロック少量。
- 3層 黒褐色土。しまりふつう。粘性ふつう。黄褐色粒子やや少量、黒褐色粒子を少量。
- 4層 黒褐色土。しまり強い。粘性強い。黄褐色粒子少量、黒褐色粒子少量。

第22図 第2号土坑実測図 (SK02)



第23図 第2号土坑出土遺物実測図

第9表 第2号土坑出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	出土 遺構	種別 器種	部位	法量(cm) 口径 器高 底径	重量	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
23-1 7-SE02-1	SK02	ロクロ土 師器 坏	底部	— — [7.2cm]	8g	ロクロ成形。底部回転糸切り。	φ1mm以下白色粒子極微量 φ1mm以下赤褐色粒子微量	やや 良	外—にぶい橙(7.5YR6/4) 内—にぶい橙(7.5YR7/4)	在地産 8c-9c
23-2 7-SE02-2	SK02	土師器 器台	脚台部	— — [6.9cm]	33g	紐作り成形。内外面指ナブ(横位)。 器面摩滅激しい。	φ1mm以下白色粒子微量 φ1mm以下石英粒子極微量	やや 良	外—橙(2.5YR6/6) 内—灰黄(2.5YR6/2)	
23-3 7-SE02-3	SK02	須恵器 甕	底部	— — [18.1cm]	46g	ロクロ成形。底部回転ヘラ削りか？	φ1mm以下黒色粒子日長 白色針状物質微量	良	外—灰(10Y6/1) 内—灰(N6/)	南比企産 9c
23-4 7-SE02-4	SK02	須恵器 坏	底部	— — [11.0cm]	19g	ロクロ成形。底部回転ヘラ削り。	φ1mm以下白色粒子微量 φ1mm以下赤褐色粒子極微 量	良	外—灰(7.5Y4/1) 内—灰(N4/)	南比企産 8c後
23-5 7-SE02-5	SK02	須恵器 坏	底部	— — [7.1cm]	16g	ロクロ成形。底部回転糸切り。	φ1mm以下白色粒子微量 φ1mm以下黒色粒子微量	良	外—灰(N6/) 内—灰(5Y6/1)	東金子産 9c
23-6 7-SE02-6	SK02	陶器 すり鉢	胴部	—	21g	外面横位平行沈線。内面縦位細密 沈線。	φ1mm以下黒色粒子微量	良	外—にぶい褐(7.5YR5/3) 内—暗褐(7.5YR3/3)	
23-7 7-SE02-7	SK02	陶器 甕	口縁部	—	163g	紐作り成形。自然軸。	φ1-3mm黒色粒子微量	良	外—暗赤褐(5YR3/3) 内—極暗赤褐(5YR2/4)	常滑産 14c
23-8 7-SE02-8	SK02	土製 紡錘車	—	—	48g	—	φ1mm以下雲母粒子微量 φ1mm以下黒色粒子中量 φ1mm以下石英粒子微量	良	灰黄(2.5Y7/2)	
23-9 7-SE02-9	SK02	砥石	—	—	79g	—	—	—	—	石材:砂岩 側面4面を研 ぎ面に使用。

## 6 ピット

遺構(第24・25図 図版3-7・8)

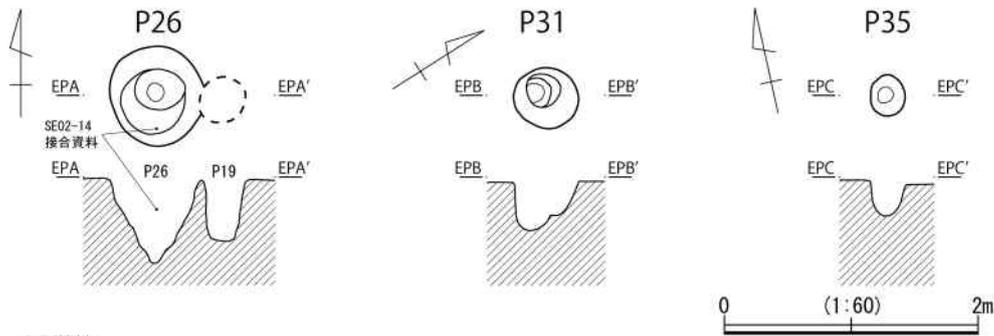
本調査区からは全部で66基のピットが検出された。このうち、整理作業時に掘立柱建物跡や柵列跡に認定したものが23基あり、残りは43基である。これらの中には掘立柱建物跡や柵列跡を構成していたものが含まれている可能性があるが、今回の整理作業における検討では見いだすことができなかった。また、発掘調査時にこれら全てのピットについて、覆土の観察はなされていないため、柱痕や重複する以降の新旧関係なども不明である。

### 遺物

ピットからは土師器20点、須恵器7点、陶器2点が出土している。遺物の各遺構への帰属についてはピット計測表内に示した。このうち3点を図示した。なお、P26出土の須恵器片はSE01出土資料と接合関係を有する。

### 時期

不明であるが、平安時代(9c頃)から中世(14c頃)に帰属する可能性が高い。



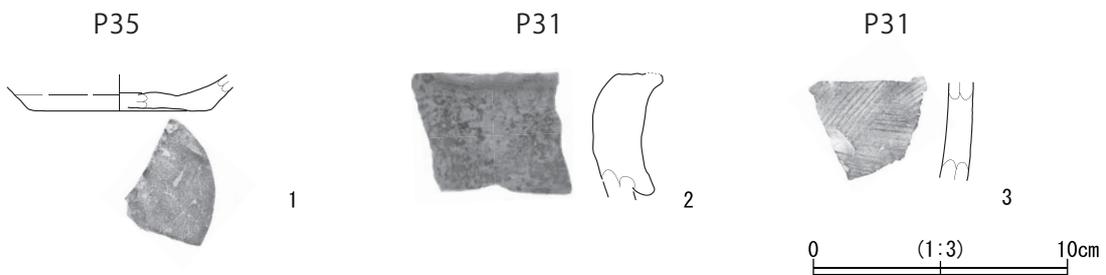
ピット計測表

遺構名	長軸長	短軸長	深さ	遺物
P03	0.32	0.32	0.08	土師器1点(5g)
P05	0.26	0.24	0.13	
P26	0.79	0.72	0.67	土師器4点(28g) 須恵器3点(76g) ※内須恵器1点(74g)はSE02-14と接合
P27	0.40	0.34	0.15	
P28	0.28	0.26	0.19	
P29	0.32	0.30	0.20	
P30	0.30	0.28	0.65	土師器4点(25g)
P31	0.52	0.48	0.38	須恵器2点(24g) 陶器2点(118g) ※第25図2・3
P32	0.32	0.30	0.18	
P33	0.32	0.30	0.27	
P34	0.30	0.28	0.19	
P35	0.32	0.27	0.28	土師器2点(18g) ※第25図1
P36	0.30	0.28	0.20	
P37	0.26	0.22	0.30	土師器2点(4g) 須恵器1点(6g)
P38	0.24	0.24	0.17	
P39	0.46	0.40	0.21	
P40	0.36	0.36	0.23	土師器1点(5g)
P41	0.48	0.44	0.37	土師器1点(3g) 須恵器1点(7g)
P42	0.24	0.24	0.17	

遺構名	長軸長	短軸長	深さ	遺物
P45	0.26	0.26	0.22	
P46	0.36	0.36	0.36	土師器1点(12g)
P47	0.38	0.30	0.31	土師器2点(14g)
P48	0.28	0.26	0.37	
P49	0.38	0.30	0.13	
P51	0.34	0.32	0.17	
P52	0.34	0.32	0.12	
P53	0.24	0.16	0.15	
P54	0.20	0.18	0.09	
P55	0.20	0.18	0.08	
P56	0.22	0.16	0.14	
P57	0.20	0.20	0.14	
P58	0.22	0.20	0.09	
P59	0.20	0.20	0.11	土師器2点(1g)
P60	0.20	0.18	0.12	
P61	0.30	0.24	0.08	
P62	0.36	0.30	0.17	
P63	0.18	0.18	0.12	
P64	0.28	0.24	0.10	
P65	0.28	0.22	0.17	
P66	0.30	0.28	0.14	

※単位は(m)

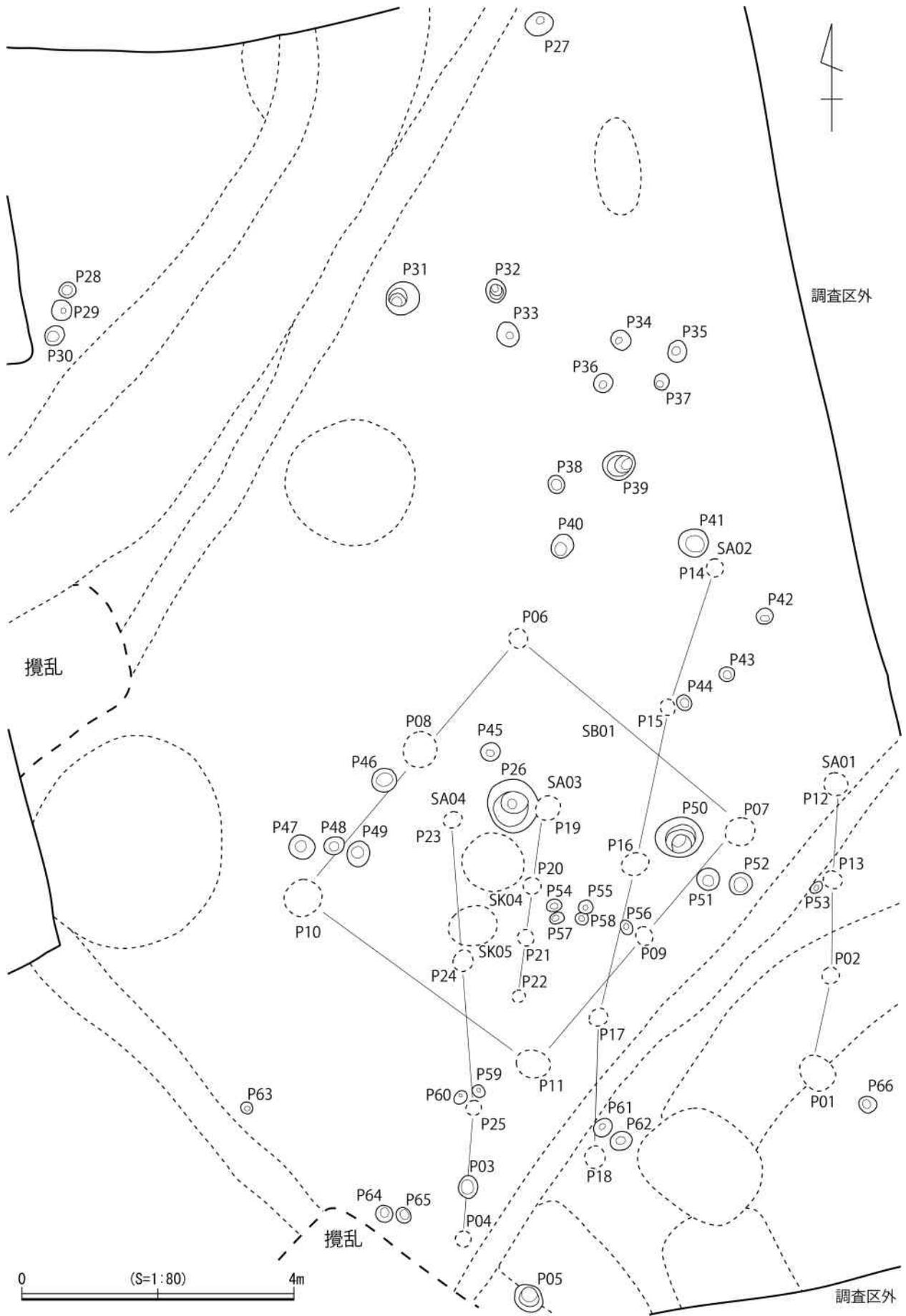
第24図 第26・31・35号ピット実測図 (P26・P31・P35)



第25図 ピット出土遺物実測図

第10表 ピット出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	出土遺構	種別 器種	部位	法量(cm) 口径 器高 底径	重量	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
25-1 7-ピット-1	P35	ロクロ土師器 坏	底部	— [7.9cm]	18g	ロクロ成形。底部回転糸切り後外周回転ヘラ削り。	φ1mm以下白色粒子極微量 φ1mm以下黑色粒子少量	良	外—にぶい橙(7.5YR6/4) 内—にぶい黄橙(10YR6/3)	在地産 9c
25-2 7-ピット-2	P31	陶器 口縁部	口縁部	—	87g	内外面自然釉。	φ1mm程度白色粒子極微量 φ1mm以下黑色粒子微量	良	外—灰白(5YR7/2) 内—灰褐(5YR4/2)	常滑産 14c
25-3 7-ピット-3	P31	陶器か? 胴部	胴部	—	30g	外面平行タタキ。	φ1mm以下白色粒子極微量 φ1mm以下石英極微量	良	外—青灰(10BG5/1) 内—青灰(10BG5/1) 破断面—灰褐(7.5YR5/2)	

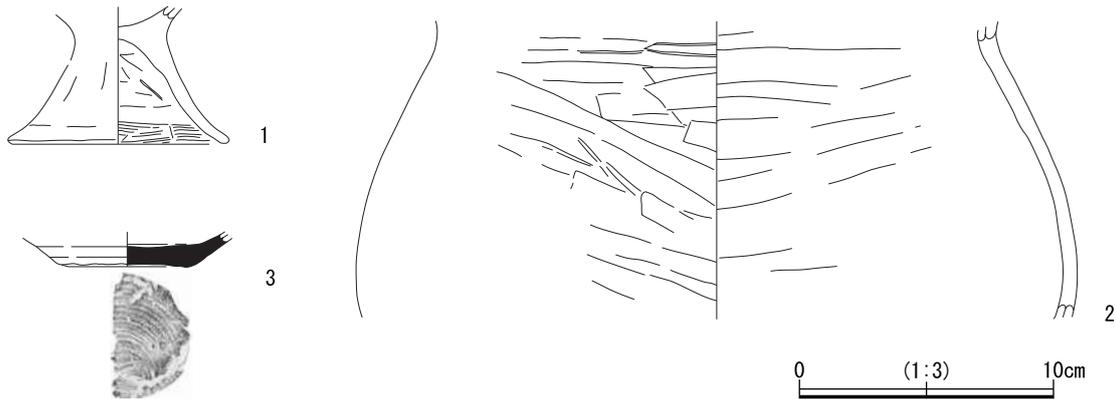


第 26 図 ピット全体図

### 第3節 その他の出土遺物

#### 1 遺構外出土遺物

本調査区からは試掘調査時に採取したものを含めて、遺構外から42点736gの資料が出土している。土師器31点485g、須恵器5点90g、陶器5点141g、陶磁器1点20gである。出土状況や出土地点については不明である。これらの内、試掘調査時に採取した土師器2点と須恵器1点を図示した。



第27図 遺構外出土遺物実測図

第11表 遺構外出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	出土遺構	種別器種	部位	法量(cm) 口径 器高 底径	重量	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
27-1 7-遺構外-1	遺構外	土師器 高环形	脚台部	— — [9.5cm]	70g	外面丁寧な指ナデ。脚台部内面下位へラナデ(横位)。	φ1mm程度褐色粒子中量 φ1mm以下黒色粒子少量 φ1mm以下白色粒子極微量	良	外—灰黄(2.5Y7/2) 内—浅黄(2.5Y7/3)	
27-2 7-遺構外-2	遺構外	土師器 甕形	胴部	—	119g	外面へラナデ(横位)。内面丁寧指ナデ。	φ1~3mm褐色粒子中量 φ1mm以下白色粒子少量 φ1mm以下石英粒子微量	良	外—黒褐(10YR3/2) 内—灰黄褐(10YR5/2)	外面炭化物付着
27-3 7-遺構外-3	遺構外	須恵器 坏	底部	— — [5.3cm]	26g	底部回転糸切り。	φ1mm以下白色粒子微量 白色針状物質極微量	良	外—灰(7.5Y6/1) 内—灰(7.5Y6/1)	南比企産9c後

## 第4章 まとめ

今回の発掘調査では、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の周溝状遺構2基、平安時代に帰属すると考えられる掘立柱建物跡1棟、溝跡3条、中世に帰属すると考えられる溝跡2条、柵列跡4列、井戸跡2基、土坑1基、その他時期不明の土坑3基とピット43基を検出した。

以下に各時代ごとに今回の発掘調査の成果について述べる。

### 1 弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭

弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の遺構は周溝状遺構2基である。調査区南東部において確認した。いずれも部分的な検出であり、本調査区の南東側を調査区とした第1次発掘調査においても続きとなる部分は検出されていないため、形状や規模等についての詳細は不明である。今回検出した周溝状遺構2基は、これまでに「方形周溝墓」や「周溝持建物跡」と呼称されてきたものと同種の遺構である。これまでの戸田市域における検出状況については『南原遺跡XI』（岩井2013）にてまとめたが、本調査における検出数を加えると計153基を数えることとなる。

第1号周溝状遺構は北西角に開口部を有する。周溝プランは隅丸方形状を呈し、各辺はやや弧状を呈すると考えられる。同様の形状の周溝状遺構は、鍛冶谷・新田口遺跡で4基検出されている。出土遺物は甕形土器、壺形土器、台付甕形土器、埴形土器である。遺物出土分布の疎密については言及し得ないが、壺形土器の底部がある程度のまとまりを持って周溝端部から出土していることから、大型破片の一括投棄を想定できる。一方で、全体の出土遺物量としては67点、319gと少なく、完形出土あるいは完形に復元可能であるものは確認できなかった。周溝内でのピットや掘り込みについても本調査では確認されていないため、周溝持建物跡として認定することはできない。

第2号周溝状遺構は、周溝の一部のみの検出であったため、周溝プランの形状は不明である。黄褐色ブロックの流れ込みが覆土の東側に見られることから、今回検出した部分は北西辺を開口部とする周溝状遺構の南西辺であったと考えられる。出土遺物は甕形土器、壺形土器、高環形土器、鉢形（埴形の可能性あり）土器である。出土量は非常に少なく、4点146gが出土したのみである。

弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭に帰属すると認定した遺構は、上記周溝状遺構2基のみであるが、いずれも部分的な検出であったため、当時の社会的な背景まで言及することは困難である。しかしながら、前谷遺跡では第1次発掘調査において2基、第3次発掘調査において6基の周溝状遺構が検出されていることから、本調査区が当該期の集落で形成された周溝状遺構群の一端に位置していたということができよう。

### 2 平安時代から中世

平安時代の遺構は掘立柱建物跡1棟、溝跡3条である。第1～3号溝跡は主軸を北東－南西に持つ長方形の区画を形成し、この区画の南東部に同一の主軸方向の掘立柱建物跡が配置される。遺物量が少なく、時期決定の明確な根拠となるような出土状況を呈する資料は検出し得なかったが、9世紀代の所産と考えられる須恵器片が最も新しい時期の所産であったため、当該期に位置づけてい

る。第1号掘立柱建物跡については、各柱穴間の距離が概ね1間から2間であったことから掘立柱建物跡に認定したが、柱穴の深度が一定ではない点や周辺に類似のピットが多数存在することからも、本遺構については今後の検討を要する。

第1号掘立柱建物跡、第1～3号溝跡はその配置から同時期に存在したものと推定でき、当時の居住空間の1区画を示すものと考えることができよう。

第1号掘立柱建物跡、第1～3号溝跡の覆土からの出土ではないが、今回の調査で最も多くの出土数となったものが、8世紀後半から9世紀代に比定できる須恵器である。出土須恵器の全てが破片資料であるが、南比企または東金子産のものが大半を占め、時期としては南比企窯跡編年の鳩山IV～VII期に比定できると考える。

中世の遺構は、溝跡2条、井戸跡2基、土坑1基である。また、出土遺物がないため断定は難しいが、柵列跡4列やその他ピット群も当該期の所産である可能性が考えられる。溝跡や井戸跡、土坑からの出土遺物の大半が弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の土器、平安時代の須恵器であるが、14世紀代に比定できる常滑産の甕やすり鉢が出土している。

第4号溝跡の断面形は皿形、第5号溝跡の断面形は逆台形状を呈しており、2条が平行して弧を描くように調査区南西部から北西部へと延びる。新旧関係については第5号溝跡が古く、第4号溝跡が新しいため、第5号溝跡が埋没した後、第5号溝跡と同じ目的を持って第4号溝跡を作ったものと思われる。溝跡の性格については不明であり、今後の検討を要する。

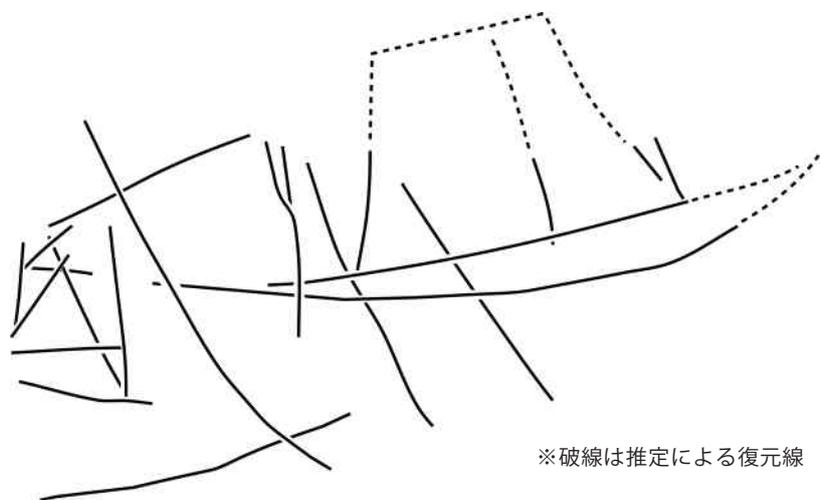
第1号井戸跡、第2号井戸跡については未完掘のため詳細は不明である。第1号井戸跡からは、所在不明となってしまっているが中世の板碑片が出土していることがわかっており、また第2号井戸跡からは保管状態が悪く本報告で掲載することはできないが漆器が出土している。

柵列跡は4列検出したが、これらはいずれも北―南に軸を持ち、4列全てが平行に配置される。性格を裏付ける資料の出土はなかったが、生け垣や防御用の柵として機能していた可能性を考慮することができよう。

### 3 線刻画が描かれた須恵器片について

今回の調査において検出した遺物の中でも特筆できるのが、第5号溝跡出土の線刻画が施された須恵器瓶破片である。本資料は残念ながら一括取り上げ資料であり、平成25年度の整理作業で初めて線刻画が描かれていることを認識したものである。

本資料は胎土、焼成とも



第28図 線刻画模式図

に他の出土須恵器とは異質であり、産地、時期等の比定は困難である。器面には細い串状の工具を用いて浅い線刻が施されているが、破片資料であるためこの線刻が何を描いたものであったかについては推測に頼らざるを得ない。線刻の順序については第 28 図に示したとおりである。報告者の私見としては、破片右側の三日月状に描かれた部分と、これに斜交するように引かれた 2 本の平行線が、舟とそれに備えられた櫂であり、また、三日月状の線刻の上部に描かれた二本の斜線とその中心軸に垂下させられた線が帆と帆柱ではないかと考えている。一方、破片左側に描かれた意匠は建物なのか、水鳥なのか、または別の舟であるか、残存部からの推定は困難である。

舟の意匠としては、長崎県壱岐市大米古墳の楯石に描かれた線刻画に酷似している。しかしながら、大米古墳の時期が 6 世紀末から 7 世紀初めと考えられること（白石 2000）、本調査区からは 8 世紀から 9 世紀を中心とする時期の須恵器しか出土していないことから、線刻画についての解釈は慎重にならざるを得ない。また、舟の線刻画が描かれた須恵器としては、千葉県君津市鹿島台遺跡の D 区第 22 号竪穴住居から出土した把手付碗があるが、こちらも TK73 型式期前後の所産と考えられている（白井・小林 2002）。本資料については今後継続して類例の検索と検討を行っていく予定である。

## 結語

今回の調査によって、弥生時代後期から中世にわたる多くの遺構・遺物を検出することができた。今後これらの資料を他の遺跡における資料と比較、検討していくことによって、より大きな成果が得られるものとする。

戸田市には古くから荒川の河川交通とともに発展してきた歴史がある。かつては「戸田の渡し」や「早瀬の渡し」、「道満の渡し」などが交通の要衝として存在し、また荒川における漁撈も盛んであったため、古来より人と舟の結びつきが非常に深い地域であると言える。本調査によって検出した線刻画を有する須恵器をはじめとする資料が、現在までに戸田で生活を営んできた人々の生活を紐解くための一助となることを期待する。

## 引用・参考文献

赤熊浩一 2012 『前谷遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第394集 公益財団法人  
埼玉県埋蔵文化財調査事業団

伊藤和彦 1978 『前谷遺跡発掘調査概要』戸田市文化財調査報告XIII 戸田市教育委員会

岩井聖吾ほか 2013 『南原遺跡XI』戸田市文化財調査報告XVIII 戸田市教育委員会

古代入間を考える会 2012 『古代入間の土器と遺跡（I）—須恵器坏の編年と遺跡動態を考  
える—』

古代入間を考える会 2013 『古代入間の土器と遺跡（II）—須恵器坏の編年（9・10世紀）—』

酒井清治・伊藤博幸 1995 『須恵器集成図録』第4巻東日本編II 雄山閣

酒井清治 2001 「生産地の様相と編年 多摩・比企」『土師器と須恵器』普及版季刊考古学  
雄山閣

塩野博・伊藤和彦 1981 「第3節 前谷遺跡」『戸田市史』資料編1 原始・古代・中世  
戸田市

白井久美子・小林 清隆 2002 「縄文時代後期の大型住居と舟の線刻をもつ須恵器—鹿島台遺  
跡の調査概要と新資料の紹介—」『研究連絡誌』63 公益財団法人 千葉県教育振興財団

白石純吾 2000 『大米古墳』郷ノ浦町文化財調査報告書 第2集 郷ノ浦町教育委員会

杉原蒼甫・大塚初重 1971 『土師式土器集成本編1（前期）』東京堂出版

中野晴久 1995 「9. 中世陶器〔2〕常滑・渥美」『概説中世の土器・陶磁器』  
中世土器研究会





1 調査区全景（南から）



2 第1号周溝状遺構・第1号土坑完掘（西から）



3 第2号周溝状遺構完掘（南東から）



4 第2号周溝状遺構遺物出土状況（方向不明）



5 第1号溝跡完掘（南西から）



1 第1号掘立柱建物跡完掘（南西から）



2 第2号溝跡完掘（南西から）



3 第3・4・5号溝跡完掘（南から）



4 第1号井戸跡未完掘状況（南東から）



5 第1号井戸跡遺物出土状況（南から）



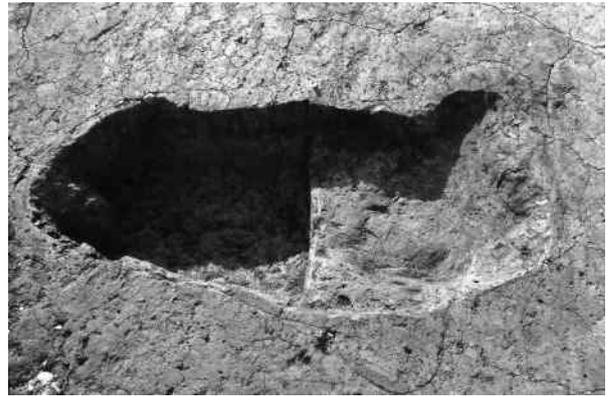
1 第1号井戸跡板碑片出土状況（方向不明）



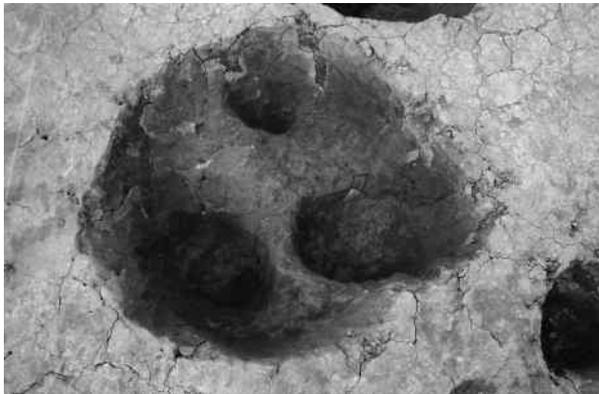
2 第2号井戸跡未完掘状況（西から）



3 第2号土坑完掘（南東から）



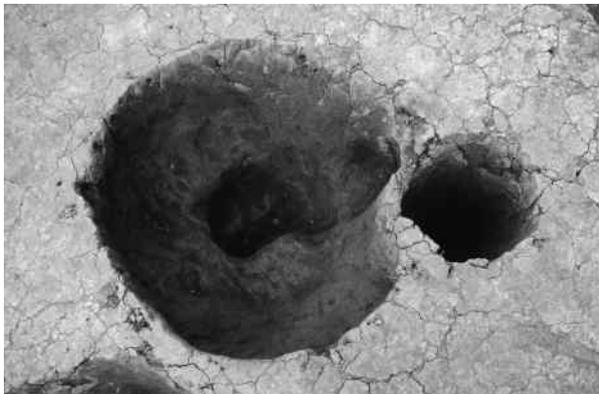
4 第3号土坑未完掘状況（西から）



5 第4号土坑完掘（南から）



6 第5号土坑完掘（南から）



7 第26号ピット完掘（南から）



8 第31号ピット完掘（方向不明）



出土遺物写真 (1)



出土遺物写真 (2)



出土遺物写真 (3)



出土遺物写真 (4)



# 報告書抄録

ふりがな	まえやいせきに まいぞうぶんかざいはくつちようさほうこくしよ									
書名	前谷遺跡Ⅱ 埋蔵文化財発掘調査報告書									
副書名										
シリーズ名	戸田市文化財調査報告									
シリーズ番号	19									
編著者名	岩井 聖吾									
編集機関	戸田市教育委員会									
所在地	〒335-8588 埼玉県戸田市上戸田1-18-1 TEL048(441)1800									
発行年月日	2014(平成26)年 3月25日									
ふりがな	ふりがな	コ	ド	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査		
所収遺跡名	所在地	市	町	村	遺跡番号	° ' "	° ' "	原因		
まえやいせき 前谷遺跡	とだしかみとだ 戸田市上戸田2丁目 26-7,8,10	11224			06- 003, 004, 005	35° 48' 50"	139° 40' 47"	07.2.13 ~ 07.7.31	970.71	共同住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項			
前谷遺跡	集落跡	弥生時代後期後半 ~ 古墳時代前期初頭	周溝状遺構	2基	土師器		・荒川流域の微高地上でよく検出される周溝状遺構を2基検出。			
		平安時代	掘立柱建物跡 溝状遺構	1棟 3条	土師器 須恵器		・方形区画内で、主軸方向を同一とする掘立柱建物跡を検出			
	中世	溝状遺構 柵列跡 井戸跡 土坑 ピット	2条 4列 2基 5基 43基	陶器 砥石 紡錘車		・舟を描いたと思われる線刻画が施された須恵器瓶を検出。				
要約	<p>本調査地点は、周知の埋蔵文化財包蔵地である前谷遺跡の範囲に属し、JR埼京線戸田公園駅から北東に約700mの戸田市上戸田2丁目26番地7、8、10に位置する。</p> <p>前谷遺跡は、荒川によって形成された平坦な沖積地（荒川低地）に、氾濫や流路変更によって左岸に発達した微高地（自然堤防）上に立地している。</p> <p>調査の結果、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭では周溝状遺構2基と土師器を検出した。平安時代では、3条の溝状遺構による方形区画内で掘立柱建物跡1棟、8世紀後半から9世紀の須恵器等を検出した。中世では、溝状遺構2条と井戸跡2基、柵列跡4列、土坑5基、その他ピットと14世紀代常滑産の陶器等を検出した。</p> <p>本調査区は弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭では、集落内に形成された周溝状遺構群の縁辺部に属し、平安時代から中世では生活の痕跡を示す遺構が存在することから居住域として利用されていたと推測される。</p>									

戸田市文化財調査報告 XIX

前 谷 遺 跡 II  
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

発行・編集 埼玉県戸田市教育委員会  
〒335-8588 埼玉県戸田市上戸田1-18-1  
TEL 048(441)1800  
印刷 関東図書株式会社  
〒336-0021 埼玉県さいたま市別紙3-1-10  
発行日 平成26年3月25日